

ISの世界に来た者。

北方守護

インフイニット・ストラトスの世界に1人の転生者が行く事になった。

だが、彼はその世界を詳しくは知らなかった………

# 目次

## 特別編

オリキャラ設定∞時系列……………1

正月特別編……………6

本編（原作開始前）……………13

第1話 原作開始前前編……………13

第2話 原作開始前後編……………17

第3話 転生して……………20

第4話 彼女との出会い……………24

第5話 ○○使いとして（前編）……………28

第6話 ○○使いとして（後編）……………34

第7話 剣乙女と悪戯兔（前編）……………38

第8話 剣乙女と悪戯兎（後編）	42
第9話 好敵手との出会い	46
第10話 一の夏と千の冬	51
第11話 手合わせを終えて	56
第12話 気まぐれ兎	62
第13話 兎との邂逅	67
第14話 認められて	71
第15話 教わる事は	78
第16話 変わり始めたもの	82
第17話 家族	86
第18話 一夏と武昭	92
第19話 彼の使うもの	97
第20話 やり方	105

第21話	白騎士事件（前編）	109
第22話	白騎士事件（後編）	115
第23話	別れと	121
第24話	少女の想いと少年の誓い	126
第25話	鈴の音との出会い	133
第26話	鈴の音との再会	141
第27話	感じる思い	147
第28話	新たな生活（中学生編）	151
第29話	知った裏側	158
第30話	ある日の思い出。	162
第31話	デート？	166
第32話	鈴音との別れ。	171
第33話	鈴との約束。	178

第34話	ドイツにて	183
第35話	暴走?	188
第36話	裏では	197
第37話	その頃……中国編。	203
第38話	その頃……ドイツ編。 少し中国編。	208
第39話	終わりと始まりと	215
本編（原作開始）		
第1話	IS学園	219
第2話	ルームメイト	227
第3話	セシリアとの再会。	234

## 特別編

### オリキャラ設定&時系列

オリジナル主人公設定。

宮本武昭（みやもと たけあき）

髪肩までの長さの黒髪で少し天パ気味。瞳少し青が入った黒。

転生特典

1. それなりに賢い頭脳。（100人中10〜20位以内に入れる程度）
2. それなりに動ける肉体。（100人中10位以内に入れる程度）
3. それなりの運の良さ。（宝くじを買うと10回中3〜4回、三等〜五等が当たる程）
4. 毎月普通に生活出来るだけのお金。（毎月30万程振り込まれる）
5. こわしや我聞の仙術。（それを元にしてオリジナルの仙術を作成可能）

6・るろうに剣心の飛天三剣流を使う事が出来る。

7～10は未定。

取り敢えずはここまでです。

残りの特典は話が進んでから出します。

オリキャラ設定

宮本武能（みやもと たけよし） 武昭の父親。

武昭が3歳の時に妻と一緒に交通事故に巻き込まれて命を落とす。

武能と五反田弾の両親は高校時代の同級生。

その繋がりです五反田弾の両親が武昭の保護者をしている。

篠ノ之柳韻とは高校は違うが同級生で何度か剣道の大会で戦っている。

初出【好敵手との出会い】

ジャック・オルコットセシリア・オルコットの父親。

マリー・オルコットセシリア・オルコットの母親。

この小説では両親は仲が良くセシリアとは仲が悪くない事にします。

初出 【剣乙女と悪戯兎（前編）】

篠ノ之葉月（しのののはづき） 篠ノ之姉妹の母親で柳韻の妻。

スタイルは姉妹に劣らず良くて柳韻とは同い年。

髪は軽い紫がかかった黒髪で長さは箒くらい。

初出 【別れと……】

簡単な時系列。（ちなみに、この内容についてはこの小説内だけの設定です。）

武昭 3歳

両親を交通事故で亡くし五反田家が保護者代わりになる。

武昭 5歳

セシリア親子と出会う。（転生して〜彼女との出会い）

それから数日後、篠ノ之道場に行き篠ノ之姉妹に出会う。(剣乙女と悪戯兔の好敵手との出会い)

武昭 6 歳

織斑姉弟と出会う。(一の夏と千の冬)

それから数日後、武昭の仙術を見た束に気に入られる。(気まぐれ兎と兎との邂逅)

その後、武昭が束に仙術を教える事になる。(教わる事は……)

武昭 7 歳

織斑家の事情を知った武昭が千冬に一千万円を貸す。(家族……)

武昭 9 歳

束がISの開発をして白騎士を作成する。(やり方)

白騎士・蒼龍事件が起こる。(白騎士事件前・後編)

武昭 10 歳

束以外の篠ノ之一家が保護プログラムで引っ越す事になる。(別れと……)

箒が一夏に告白するが一夏が自分の気持ちに整理がつくまで保留される。(少女

の思いと少年の誓い)

武昭が篠ノ之神社に引越し、公園でいじめられていた鈴を助ける。(鈴の音との出会い)

武昭 12歳

武昭達が小学校を卒業する。(感じる思い)

---

この設定は話が進むとその都度更新します。

## 正月特別編

今回は、前回の前書きを少し休んで特別編にします。

簡単な設定としては武昭がIS学園に入学している時間軸の話です。

それでは、皆さんへの年賀始めとして楽しんでください。

---

12月31日から1月1日になった日の朝……………

「うーん……………なんだ、まだ、こんな時間なのか……………ん？」

自室で寝てた武昭が起きようとするのと体が動かなかったので確認すると……………

「ううん……………武昭……………」と右腕にシャルロット

「暖かいですわ……………」と左腕にセシリア

「武昭……………」と胸の上に簪と

それぞれに抱き着いたり乗っていたりして、そして……………

「ありがとう……武昭君……」と楯無が膝枕をしていた。

「そーいや、皆が来てたんだっけ……」

「うーん……あら、起きてたのね」

武昭が起きて状況確認していると楯無が目を覚ました。

「ええ、少し前に気がついたんです。

それよりも、すみませんでした、膝枕をしてくれてて」

「気にしなくて良いわよ、私がしたくてしてたんだから」

楯無は優しい笑顔で武昭の頭を撫でた。

「ありがとうございます。それよりも、なんで俺はこんな事になってるんですか？」

┌

「それは、私達がジャンケンをして決めたから」

「それで簪が一番に勝ったんだよ」

「そして、わたくし達が2番目3番目と続いたんですの」

「それで、最後に残った私が、こうしてるって訳よ」

武昭と楯無が話していると簪、シャルロット、セシリアも目を覚ました。

「そうだったのか、悪いけどトイレに行きたいから離れてくれるか？」

そういうと3人は落ち込みながら武昭から離れた。

その後……………

「おっ、一夏達は居間にいたのか」

武昭達が居間に降りると一夏、箒、鈴、ラウラがいた。

「ああ、武昭が自室に行ったから少し寝てから軽く片付けをしてたんだ」

「そうだったのか、ありがとうな皆」

「気にするな、私達が押しかけた様な物だからな」

「それに、私達が自分からしたから気にしなくて良いわよ」

「ああ、わかったよ。そういや、皆はこれからどうするんだ？」

「そうだなあ……………こんな時間に帰っても何処か中途半端だし……」

「あっ、なら初日の出でも見に行くか？」

この時間なら、ちょうど良い時間で見える事が出来るぞ？」

「良いじゃない、行きましようよ」

「だったら厚着をした方が良くぞ、行く場所はそれなりに寒い場所だから」

「だが、私はそんなに服は無いぞ」

「なら、俺の昔の服があるから貸してやるよ。」

他の皆にも母さんの服があるから着るなら着て良いぞ。」

「なら、私も貸してもらおうかな」

「すみませんが、わたくしもお借りいたします」

「一夏は俺の奴で構わないか？」

「ああ、大丈夫だ。一夏は俺の部屋で着替えて

女性陣は、そっちの大広間で着替えてくれ」

指示された皆は、それぞれの部屋に向かった。



武昭の家を出た皆は初日の出を見に行ったが……………

「ちよっと武昭…こんな所で初日の出を見れる訳ないでしょう!!」

着いた場所は木が生い茂る森で目の前には多数の木々が絡んでおり

それを見た鈴が怒っていた。

「確かに鈴の言う通りだな、ここで初日の出が見れるとは思わないが……………」

「武昭君、何処か違う場所に行った方が良いんじゃない？」

「いえ、ここで良いんですよ。この先は俺じゃないと行けませんから

仙術・触・樹根操……ふう、ほら道が出来たぞ」

武昭が木々に触って少しすると枝が動いてトンネル状の道が出来て

そのまま進んだので皆も、その後を付いて行った。



武昭達が木々のトンネルを進んで、それなりに歩くと目的地に到着した。

「ほら、ここが目的地だぞ」

「うわぁーすごい綺麗……」

その景色を見た皆は、その壮大さに感動していた。

その景色は突き出た崖の先にあり、大海原の空に太陽がある場所だった。

「ここは、俺が両親と最後に来た場所だな、家族以外じゃ皆が初めてなんだ

だから、大切な人達と共に闘う仲間達に見せたかったから連れてきたかったんだ。

じゃあ、軽くお参りをして帰るか」

武昭の言葉に皆は、それぞれがお参りをした。

それぞれが自分が願いたい事を思いながら………

これが新年一発目の作品です。

これはifの話とも、未来のともいえる作品です。

今年は皆さんにとって良い年でありますように

それでは、これからよろしくお願いします。



## 本編（原作開始前）

### 第1話 原作開始前 前編

とある白い空間に “カレ” は居た。

「えっと……ここは何処だ？」

その者は自分が何故、そこに居るのを思い出そうとしたが………

「なんで、思い出せないんだ!?! ……それよりも俺は一体誰なんだ!?!」

「それは、お主が命を落としたからじゃ………」

「なっ!?! 一体誰だ! 何処に居る。!!」

「儂は、お主の傍におり、お主から離れた所におる」

「はあっ? 何を意味がわからない事を言ってるんだ!

それよりも、俺が命を落としたって、どういう事だ!」

「それは、言葉通りじゃ……お主は睡眠中に心臓停止が起こり、そのまま………」

「そうか……まあ、あのまま生きてても何もやりたい事も無かったし

仕事も只、たまたま入った会社での物だったからな……」

その者は自分の状況を確認すると地面と思われる場所に座ると声の主に問いかけた。

「それで、俺が行く世界はどんな世界なんだ？」

「それは、インフィニット・ストラトスというパワードスーツが存在している作品で

お主の世界では、ライトノベルとして書かれていた物じゃ

知っておるじゃろ？」

「悪いが、俺はそのインフィニット・ストラトスって作品を読んだ事が無いんだ」

「ほう、そうじゃったのか。ではどんな物を読んでいたのじゃ？」

「俺が読んでた本って言ったら……子供頃からの流れで週刊誌系のマンガだったな」

「ふむ……では、その中からお主に転生特典を授けるとしようかの」

「はあっ？ 転生特典って、俺がそこに行くのは決定なのか」

「そうじゃ、儂は幾つかの世界を管理しておるが、今転生可能な世界がそこだけなのじゃ」

「ふーん、そうなんだ……それで、その特典は一つだけなのか？」

「いや、それはコレで決めるのじゃ」

彼の目の前が光り輝き始め暫くすると光が集まり始めて一つのサイコロが合った。

「それを振って出た目の数だけの特典を授けよう」

「最高で6個って事か……じゃあ振りますかっ！」

彼がサイコロを高く投げ上げ少しすると下に落ちた………が

「な、なんじゃとっ!？」

「あら?……えっと、この場合はどうなるんだ？」

落ちたサイコロは2つに割れて1・6の面が出た。

「このままで行くと7個の特典が貰えるって事になるみたいだけど………」

「まあ、出たからには仕方ないじゃろう、それでどんな特典が欲しいんじゃ」

「そうだなあゝ急にそんな事を言われても……じゃあその世界がどんな世界か教え

てくれないか？

それが一つ目って事で」

「まあ、その程度ならば特典を使わなくても平気じゃ」

その者はその存在から詳しい話を聞いていた。

## 第2話 原作開始前後編

ある存在から詳しい話を聞いた人物は何となく理解していた。

「ふーん、インフィニット・ストラトス通称ISが開発されてから世の中が女尊男卑の世界になってるのか」

「まあ、それは、お主が転生する事でどうなるかはわからぬがな」

「そっか、俺は本来ならその世界に居ない存在だからな……」

「それで、お主はどんな特典を望むのじゃ？」

「そうだなあゝまずは、それなりに賢い頭と動ける運動能力を備えた肉体だな」

「ふむ、今世紀初の天才だとか、敵う者が居ない程と呼ばれる位で無くても良いのか？」

「ああ、知識や運動能力って奴は俺が努力してつけければ良いんだからな」

「ほう、そうなのか（儂も長い間生きてきて何人かの者を転生させてきたが

この様な事を言った者は久し振りじゃのう……）」

存在はそれを聞いて感心していた。

「それで、残りはどうするのじゃ？」

「残りは5個だな……じゃあ、それなりの運の良さと毎月普通の生活が出来る程のお金を貰いたい」

「ふむ、それで後はどうするのじゃ？ 様々な超能力や戦闘技術はどうじゃ？」

「いや、俺はそんな力を貰うつもりは無い」

「それは何故じゃ？ お主が行く世界は一步違えば命の危険があるんじゃないぞ？」

「それなら、俺の運命はそこまでだったって事だ」

「ほう……それなら“コレ”を使おうかの」

存在は一つの箱を彼の前に出した。

「それには、あらゆるマンガやゲーム等で使われてる能力やオリジナルな技術が書かれた紙が入っている」

「なるほど、それを引いて決めるって事か……じゃあ引くか」

彼が紙を引くと同時に光の結晶になり彼の体内に取り込まれた。

「その紙の内容はお主が転生させてからではないと教える事が出来ぬのじゃ」

「そうなのか。じゃあ早く転生させてくれないか？」

〔ふむ、心得た……………〕

存在が聞いた事が無い言葉を唱えたと彼が光り輝いた。

〔そのまま待っているとお主は新たな世界に転生するのじゃ〕

「そうか、まあなんか迷惑を掛けて済まなかったな」

〔いや、迷惑を掛けたのは僕の方じゃよ……………〕

新たな世界において、お主に神の加護があらん事を……………〕

存在が神の祝福を唱え終わると同時に彼は、その場から消えた。

〔ふう……………これで彼の転生は終わったから次は転生特典じゃな……………〕

存在が紙を確認しようと手に出した時に3枚だった筈の紙が5枚合った。

〔なっ!?何故、連続して起こるのが珍しい事が何度も……………〕

まあ、まずは中身の確認じゃな……………

ほう……………ある意味、あの者に合ってる特典じゃのう〕

中身を確認した存在は何処となく納得していた。

## 第3話 転生して

ここで最初の原作キャラと会います。

彼がISの世界に転生して5年経っており、今は……………

「ハアハアハア 朝の運動終わりだ……………」

体を鍛えて終えて縁側で横になった。

「朝飯は昨夜の残りにするか。まずはシャワーを浴びるか……………」

父さん、母さん、おはようございます……………」

彼は浴室に向かう途中に仏間の仏壇に線香をあげた。

実は彼の両親は彼が3歳の時に交通事故に合っていた。

その後彼はシャワーを浴びて朝食を食べ居間で休んでいた。

「さてと、今日は何をするかなあ……………ん？」

「おーい、居ないのかー？」

「あの声は、＼アイツ、＼か居るぞー鍵は開いてるからー」

彼はチャイムを鳴らした人物に心当たりが合ったので

家内に招き入れると、そのまま居間に来た。

「おっ、こんな朝早くに悪いな、武昭、」

「気にするなよ、お前の両親には世話になってるからな、＼弾、」

入って来た少年は赤い髪をした五反田弾という人物で彼の両親が武昭の保護者をしていた。

「うちの両親が武昭の両親と同級生だった繋がりだけだな。

それよりも、爺ちゃんが持って行けって」

「ああ、悪いな。巖さんにも迷惑を掛けて」

武昭は弾から料理が入ったタッパを冷蔵庫にしまうと麦茶を出した。

「おっ、ありがとうな武昭」

「それで今日はどうしたんだ？」

「とくに理由は無くて暇をしてたら母さんに持ってってくれて言われてな」

「そうか、だったら何処かに行くか？」

「そうだな、そうするか」

弾が麦茶を飲み終えたのを確認すると二人は外出した。



外出した二人は近くの公園で遊んでいた。

「それにしても、武昭って何処か子供らしくないよな」

「まあ、両親を亡くしてるとどうしてもな……」

（俺が一度命を落としてるって話しても信じないだろ）」

「おっ、武昭あそこ見てみるよ」

「ん？ どうしたんだ弾」

考え事をしてた武昭が声を掛けられたので弾が指差した方を見ると

同じ年位の金髪の女の子が何処かアタフタしていた。

「すっげー！ 俺、外国人を始めて見たぞー!!」

「俺もだけど、何か困ってるみたいだな。

弾、ちょっと待っててくれるか？」

弾に断りを入れた武昭は女の子に近寄った。



その金髪の女の子は両親と日本に来ていたが、はぐれてしまい迷子になっていた。「どうしたら良いのでしょうか？……お父様とお母様に

連絡を取ろうにも、わたくしはこの国のお金を持ってませんし……」（因みに外国語です。）

「あのーどうかしましたか？」

武昭が女の子に声を掛けると英語だったので何処か安堵した様な表情を見せた。

## 第4話 彼女との出会い

この話でヒロイン候補？とオリキャラの名前が出ます。

武昭に声を掛けられた女の子は何処か警戒していたが異なる言葉か通じるみたいなので

そのまま話し掛けた。

「あの……アナタはわたくしの言葉が分かるのですか？」

「ええ、日常会話位ですけどそれで何か困ってるみたいだったので声をかけたんですけど、どうしたんですか？」

「は、はいっ、実は……」

女の子は自分の事情を話した。

「なるほど、ご両親とはぐれて歩いていたら、この公園に来ちゃったのか」

「**恥ずかしい事ですが……それに言葉も通じないので警察の方と**

話す事も無理なのです……………」

女の子が恥ずかしさから赤い顔で俯いたので武昭は元氣を出す為に手を握った。

「大丈夫だよ。俺と一緒に探してあげるから」

「そんな！見ず知らずの方に、その様な事をしてもらう訳にはいきません!!」

「困った人を放っておくのは俺が嫌なんだ、それに俺がいけないと言葉が通じないよ？」

「わ、分かりましたわ。すみませんが、わたくしのご両親を探す手伝いをしてください。」

「良いですよ、俺が自分から言ったからね。そう言えば互いに自己紹介をしてみせんでしたね。」

「そうでしたわ。わたくしの名前はセシリア・オルコットと言います。」

「俺の名前は、宮本武昭。皆からは武昭って呼ばれてる。」

「そうですか。では、わたくしの事もセシリアとお呼びして下さい。」

二人が自己紹介をして握手をすると弾が来たので武昭はセシリアの事情を説明した。

「おい武昭、どうしたんだー？」

「ああ、弾。実は……」

「ふーん、そうだったのか。じゃあ俺も手伝うか？」

「それは良いけど、弾じゃ言葉が通じないだろ？」

「くっ、そうだった……」

武昭を手伝おうとした弾は軽く落ち込んだ。

「それよりも、弾は家に戻って蓮さんに聞いてほしいんだ

何処かで金髪の夫婦を見なかったかって？

弾なら出前も手伝ってるから顔は広いだろうし……」

「そうか、わかったよ。見かけたって聞いたら連絡するぜ」

武昭に頼み事をされた弾は直ぐに家に帰った。

「じゃあセシリアが覚えてる場所を辿りながらご両親を探そうか？」

「はいっ、よろしくお願いします」

武昭はセシリアを連れて公園を出た。



公園を出た二人はセシリアの記憶を辿りながら両親を探していた。

「この辺りに見覚えは？」

「いえ、この様な景色は見ていませんわ……………」

「そっか、じゃあアッチの方かな……………ん？」

「なあ少年その子を、コッチに渡してくれないか？」

「えっと……………アナタ達は誰ですか？」

武昭が声のした方を見ると数人の黒服の男達がいたのでセシリアを守る様に立ちました。

---

次の話では、武昭が存在から貰った転生特典の一つが出ます。

## 第5話 ○○使いとして（前編）

皆さん、あけましておめでとうございます。

2016年、初めての投稿です。

どうか、楽しんでください。

セシリアの前に立った武昭は男達の一人に話しかけた。

「おじさん達って、彼女とはどういう関係？」

「ああ、俺達はセシリアのご両親から探す様に頼まれたんだ」

「そうなんですか……でしたら、何で懐に

“日本では持ってたら駄目な物を入れてるんですか”？

セシリア！今の内だ！！」

「チッ！おいっ！ガキ共を追いかけるぞ！！」

武昭は男達が一瞬驚いた様な顔を見せると同時にセシリアの手を握ってその場から逃げたが男達は直ぐに追跡を開始した。



一方……………

「た、武昭さん？何故、あの方達から逃げ出したのですか？」

セシリアは自分の状況がわかっていなかった。

「多分だけど、あの人達はセシリアを誘拐か何かをするつもりなんだ

セシリアは心当たりが無いか？」

「そういえばお父様からは離れるなど言われてましたわ…………

わたくしが言いつけを守っていれば、この様な事には……………」

セシリアは自分がした事に後悔していた。

「大丈夫だ、セシリアには俺がいるんだ。必ず、ご両親の元に帰してやる。」

「武昭さん…………ですが、わたくしが理由でこんな事になってるんですよ！」

「俺はセシリアの友達だ、困ってたら助ける、ただそれだけだ！」

「武昭さん（な、なんですの？わたくしの胸に感じる、この感じは？）」

武昭の言葉を聞いたセシリアは軽く頬を染めながら自分の心中に何らかの感情が出来た事に戸惑っていた。

「チッ、コッチだセシリア!!」

「へっ、あっち側は町外れだから好きに出来るぜ」

男達に挟まれた武昭達は街から離れて行き、それを見た男達はチャンスとばかりに後を追いかけた。



武昭達が到着した場所は廃工場があり中には大きな水槽が置いてあり  
“多量の雨水”が溜まっていた。

「武昭さんは、わたくしを置いて逃げてください……………」

あの人達も、それならば見逃すかもしれません。」

「それは断らせてもらうよ。あいつらは目撃者を見逃すつもりは無い。

それに、この場所なら、もう俺の勝ちが決まったよ。」

武昭が水槽内に足を踏み入れると同時に男達が廃工場に入ってきた。

「さあ！鬼ごっこは終わりだ。その子をコッチに渡してもらおうか？」

「そうしたかったら力づくでやってみたらどうだ？

あんたらみたいなクズは、そっちの方が得意だろう？」

「このクソガキがあ！舐めた口きいてんじゃねえぞ!!」

「俺をただのガキと思わない方がよいよ」

武昭が向かって来た男の一人の両膝を殴ると同時に男が転んだ

「けっ、油断しちまった……なっ!!」

武昭が向かってきた男の両膝を殴って転ばせたので

男が立とうとした時に両膝の関節が外れている事に気付いた。

「テメエ、何をしやがった!？」

「簡単な事だよ、この人の関節を外しただけだよっ！」

武昭は男を仲間達の方に蹴り飛ばした。

「どうやら近付かない方がよいみたいだな。だったらコレならどうだ!？」

「武昭さん！危ないっ!!」

「さっきも言っただろ？この場所なら俺の勝ちだって！」

男達が拳銃を撃った事に危険を感じたセシリアは叫んだが武昭は慌てる事無く

足を踏み込むと同時に足元の水が吹き上がって弾丸を防いだ。

「なっ!? 水が勝手に動いて弾を防いだだっ!」

「これは……一体、何が起きているんですの?」

「こいつは俺の特技の一つなんだよ。そういや言い忘れてた事が一つあったか  
我は仙術使い宮本武昭。この力を使って友を守る者なり!」

武昭は弾丸を手に乗せて男達に投げ返すと廃工場内に響くほどに宣言した。

---

はい、オリキャラの名前と能力がまずは一つ判明しました。

彼が使う仙術は転生特典で与えられた物で

昔に週間サンデーで連載してた『こわし屋我聞』という作品の中で使われていた  
物です。

これが箱から引いた5枚の中の1枚です。

詳しい説明は、また違う話でしたいと考えてます。  
それでは、これからもよろしくお願いします。

## 第6話 ○○使いとして（後編）

武昭達が男達を見据えると足元の水が再び動き出した。

「さあ、ここからは俺のターンだ！ 巻・水雨（かん・すいう）！」

「ちっ！ 水の球が散弾銃みたく飛んで来やがる！」

「へっ、さっき迄の威勢はどうしたんだよ！」

「くそっ！ なめんじゃねえ!!」

「武昭さん！ 危ない!!」

男達の一人が武昭に近付いて来たのを見たセシリアは大声を上げたが

武昭は平然としていた。

「仲々やるじゃないすか、けど近付いても無駄だ！ 弾・双掌砲!!」

「ガハッ！」

武昭に近付いた男は工場の壁まで吹き飛ばされて気絶した。

「ふう、このまま諦めるならこれ以上は手出しはしませんけど？」

「ふざけるな！ 大金が手に入れられるのを簡単に諦められるかよっ!!」

「そうですか……だったら俺も容赦はしません……」

武昭は水槽から出ると男達の前に立ったが、その雰囲気が変わっていた。

「ほう、どう容赦しないのか教えてもらおうかぁ!!」

水槽から出た武昭は男達の前に立ったが、先ほどとは雰囲気が変わっている事に気付かない

男達はそれをチャンスと思い囲むと飛びかかって来た。

「今の、あんたらは凄い濡れてますよね？俺の水をかぶって」

「それが、どうしたって言うんだぁ!？」

「濡れてるって事は…… “電気” を通しやすいつて事ですね？」

「なっ?!そいつはまさか!？」

男達の一人が武昭の両手に電気が起きてる事に気付いた。

「まあ、死ぬ事は無いですけど暫く眠っててもらいますよ！

砕・雷網（さい・いかづちあみ）!!」

武昭が両手を上に上げると多量の電気が発生し男達を感電させ

それを見てたセシリアが近付いて来た。

「この方達は、どうなったんですの？」

「いや、そこまでの電圧は出してないよ。」

こんな奴らのせいで犯罪者になるつもりはないからね。

そうだ、俺が使った仙術の事は他の人には秘密にしててくれないかな？」

「どうしてですか？」

「こんな変わった力を持つてる事が知られると変な考えの奴が

寄って来たり、俺を変な目で見たりするから……」

「武昭さん……：……分かりましたわ、このセシリア・オルコット

わたくし自身の心に誓わせてもらいます。

それが、助けてくれた方への礼儀です」

「ありがとう、セシリア……ん？ 弾からか、はい」

「おっ、武昭か、今お前は何処に居るんだ？」

武昭の携帯が鳴ったので出ると弾からで居場所を聞いた。

「俺は今、町外れの廃工場に居るぞ」

「何で、そこに居るのは聞かないからな……」

ああ、そうだ店に戻って母さんに聞いたら

金髪の外人夫婦が慌てて警察に駆け込んだのを見たって言ってたんだよ」

「そうだったんだ、じゃあ俺が直接セシリアを連れて警察に行くよ」

弾にそう言った武昭は携帯を切ると聞いた事をセシリアに教えて警察に行った。

## 第7話 剣乙女と悪戯兎（前編）

今回は武昭が新たな原作キャラと出会います。

（まあ、タイトルで予想がつかますが……）

弾から連絡を受けた武昭がセシリアを連れて警察に行くと金髪の男女がおり  
それを見たセシリアが慌てて駆け寄ったので女性も駆け寄ると、そのまま抱き締  
めた。

「お母様！……ご迷惑を掛けて、すみませんでした……」

「良いのよセシリア、貴女がこうして無事だったのだから」

「いえ、実はわたくしはある方に助けってもらったのです」

セシリアが視線を武昭に向けると父親と思われる男性が近寄って来た。

「うちの娘を助けてくれて感謝する……おっと、言葉が通じないか……」





「すみませーん、誰かいませんか？」

「お前、誰だよ？」

武昭が誰かを呼ぶと機械的なウサ耳を頭に付けたアリス風ドレスを着た女性が出てきた。

「はい、こちらの方と呼ばれた者ですが」

「あつ、そう。だったら勝手に上がって道場に会いに行きなよ。わたしには関係無いから」

女性は武昭に興味が無く、その場から立ち去った。

「なんだろう、あの人は？まあ、許可はもらったから上がりませんか」

武昭が上がると道場を目指した。

## 第8話 剣乙女と悪戯兎（後編）

家が上がった武昭は道場を目指した。

「それにしても、この家は広いな……おっ、ここだな

あれ？誰もいないな……まさか入れ違いになったのかな……」

武昭が道場に入ると無人だった。

「まあ、誰か来るまでここで待たせてもらうか……」

「おいっ！お前は誰だ!？」

武昭が道場に入って中を見てると黒髪で同い年ほどの女子がいた。

「いや俺は「そうか！強盗だな！だったら私が倒してやるっ!!」うわっ！」

女子は武昭が説明する前に竹刀を持って襲ってきた。

「ちっ、人の話を聞きやがれ!!」

「うるさいっ！強盗の言う事なんか聞くものかっ!!」

女子は息もつかせず攻撃してきたが武昭は躲していた。

「全く……そっちが、そうくるんなら俺も行かせてもらうよ！」

「なっ!?! 私の竹刀を止めただっ!?!」

女子は自分の攻撃が片手で止められた事に驚いていた。

「なかなか、やるみたいだけど、上には上がいるんだよっ!」

「しまった! やられるっ!!……………(ん? 何で痛みが来ないんだ?……………) あっ」

女子が竹刀を弾き飛ばされて攻撃が来ると思い目を瞑ったが衝撃がいつまでも来ないので

目を開くと武昭は当たる寸前で拳を止めていた。

「ふう、頭は冷えたかな?」

「なんで……………そのまま攻撃しなかったんだ?」

「別に攻撃する必要も無いし、それに俺の話を聞いて欲しかったからさ」

「話だと?」

「そうだよ、俺の名前は宮本武昭。ここに来たのは篠ノ之柳韻さんから手紙を買ったからだ」

武昭が女子に手紙を見せると慌てて土下座をした。

「すまなかった! 知らない事とは知らず、あんな事をしてしまっ!!」

「い、いや俺だって勝手に入った様な物だからお互いが悪いって事で」

「だが、それでは私の気が済まない。だから私が出る範囲で何でもしよう」

「何でもって言われても………だったら俺と友達になつてよ」

武昭は女子を立たせると手を差し出した。

「そんな事くらいで良いのか？」

「ああ、俺はこの街に来たばかりだから、まだ友達はいないんだ、だから」

「そうか……その様な事情ならわかった、そうだ私の名前は篠ノ之箒と言おう」

「これからよろしく篠ノ之さん。ああ、俺を呼ぶ時は名前で構わないよ」

「では、私の事も箒と呼んでくれ。篠ノ之では他に家族がいて紛らわしいのでな」

「わかったよ箒、そうだ悪いけど柳韻さんと呼んできてくれるか？」

「うむ、少し待っていてくれ」

箒が柳韻さん呼びに道場を出たので武昭は置いてあった座布団に座った。

「そーいや箒にあのウサ耳を付けた人の事を聞いておけばよかつたな、まあ後でも

良いか」

座りながら武昭は最初に会った女性の事を考えていた。

はい、今回の前後編では武昭が箒と会いセシリアの両親の名前が出ました。

まずセシリアの両親の名前については何となく外人らしいとの事で見つけました。ちなみに、この時はまだISが世間に出てないのでセシリア一家は仲良しです。

それでは今回は、この辺りで終わらせてもらいます。

## 第9話 好敵手との出会い

今回は武昭が篠ノ之道場に通います。

篠ノ之柳韻と会った武昭は母屋にある和室に通されていた。

「それにしても、私が会った時にはまだ小さかった武昭君がこれ程までに大きくなってるなんてね」

「えっと……俺に会った事があるんですか？」

「ハハハ、会ったとは言っても君がまだ赤ん坊の頃だったから覚えてないのは無理も無い」

柳韻はお茶を飲むと武昭を呼んだ理由を話した。

「それで、今回武昭君を呼んだのはウチの道場で剣術の稽古をしないか、という事で一筆書いたんだ」

「剣術の稽古です……それは俺にとっても良い提案ですけど……」

「ああ、武昭君が使う剣術の流派の事なら父親から……武能（たけよし）から聞いている

だからウチの道場では基本技術と体力をつけてもらいたいんだ。」

「その様な事情なら……ありがたく受けさせてもらいます。」

武昭は柳韻からの提案を了承すると頭を下げた。

「だったら着替えて道場に行ってくれ、私も準備をしたら向かう」

「はい、分かりました」

そう言うのと武昭は自前の道着に着替えて道場に向かった。



武昭が道場に入ると道着に着替えた筈がいた。

「なんだ筈が先に練習してたのか」

「おお武昭か……って、その格好はどうしたんだ？」

「ああ、柳韻さんに言われて今日からこの道場に通う事になったんだ」

「そうだったのか、だが武昭は剣術は出来るのか？」

「まあ、ウチの家系は昔から受け継いだ流派が有ってな、ここでは剣術の基本技術を鍛えるんだ」

「へえ武昭の所も流派を受け継いでるのか、私の家も篠ノ之流という流派を受け継いでるんだ」

「おう、どうやら二人とも仲良くなったみたいだな」

「柳韻さん」「父さん」

「箒も武昭君から聞いたと思うが、これから彼もウチの道場に通う事になった。

箒とは同じ年だから互いに切磋琢磨していくんだ」

「ハイッ!!」

「うむ、いい返事だ。では最初は素振りから開始する！」  
指示を受けた武昭と箒は言われた通りに練習を開始した。



◆  
その後……

「よし、今日の練習はここまでとする」

「ありがとうございました!!」

柳韻が道場を出たのを確認した2人は床に座り込んだ。

「ハアハアハア……武昭、初めてにしては、よくついてこれたな」

「自分でも、それなりに鍛えてはいるからな」

「そう言えば武昭は何処に住んでいるんだ？近所では見た事が無いのだが……」

「ああ、俺は一駅離れた〇〇に住んでるんだ」

「そうだったのか……では、これから家に帰るのか？」

「そうだよっと、そろそろ電車の時間か、じゃあな箒」

「ああまたな（私はまだ疲れているというのに武昭は平然としているではないか）  
箒は同じ稽古をして疲れている自分と違って普通に動ける武昭を見て感心して  
いた。」

今回は武昭の父親の名前が出ました。

簡単な設定としては篠ノ之柳韻さんと父親は高校時代のライバルでありながら親友であるという事にします。

詳しい設定は後ほど出しますので楽しみにしててください。

それでは

## 第10話 一の夏と千の冬

タイトルから予想がつかますが武昭と彼らが出会います。

それに今回は前話から1年ほど経った時間軸となっています。

それでは、お楽しみに

---

武昭が篠ノ之道場に通い初めて1年ほど経ったある日の事……………

「こんにち柳韻さん。あれ？彼女は……初めて拝見しますけど」

「やあいらっしゃい武昭君、彼女は織斑千冬と言ってウチの道場に通いたいと来たんだ。」

ああ、彼は私の友の息子で宮本武昭と言うんだ」

武昭が道場に向かうと柳韻と黒髪で武昭よりも年上の女性が正座を

柳韻から紹介をされると互いに自己紹介をした。

「初めまして、この道場に1年ほど前から通っている宮本武昭と言います」

「若いのに礼儀正しい子だな、私の名前は織斑千冬と言う、よろしく頼む」

互いに自己紹介をした武昭と千冬は握手をした。



千冬が道場に通う事になって半月ほど経ったある日の事……

道場内の部屋で柳韻と千冬が話をしていた。

「千冬ちゃん急に呼び出して悪かったね」

「いえ、気にしないでください柳韻さん、それで今日はどの様な要件ですか？」

「実は千冬ちゃんに武昭君と一つ手合わせをしてほしいんだ」

「はあ、私は別に構いませんけど……何故、武昭となんですか？」

柳「実は、この道場内で千冬ちゃんに敵う相手がいないのでね、

それで武昭君と手合わせをしてもらおうと考えたんだ」

「柳韻さん……その言い方では武昭が私と同じ程度の方に聞こえるのですが？」

柳韻の言葉を聞いた千冬は軽く怒りを感じていた。

「確かに千冬ちゃんが、そう感じるのはわかるけど……」

この道場内で武昭君は1と2を争う程の腕前だよ」

「分かりました……柳韻さんが、そこまで言うなら、その話を受けさせてもらいます」

「そうか、では武昭君を呼んで来よう」

柳韻は部屋を出て武昭を呼びに向かった。



柳韻に呼び出された武昭は理由を聞いて道場で正対していた。

「俺は構いませんけど、千冬さんは本当に良いんですか？」

「私は構わない。柳韻さんが、あそこまで言うのだ、どれ程のものか見せてもらおう」

「はい分かりました……そうだ柳韻さん俺は“アレ”を使っても良いんですか？」

「ああ、私は構わないが……千冬ちゃんに聞いてみないと」

「アレとは何か分からないが武昭が使いたいと言うなら自由にすが良いだろう。

早くかまえろ」

「そうですか、じゃあ……始めますか」

「では……初めっ!!」

柳韻が合図を出したが千冬は攻めあぐねていた。

(なんだ……この気配は?……いつもの武昭から感じる物とは違う!!)

「千冬さんが動かないなら、俺から行きますっ!」

「なっ?!なんだ、今の早さは?くっ!(確か、武昭は一夏と同じ年だったはずだ)」

千冬は武昭がいつの間にか目の前にいた事に驚いていたが何とか反応出来た。

「へえ、さすがですね今の早さに付いていけるなんて……」

けど、手合わせは、まだ始まったばかりですよ!!」

武昭は千冬に向かっていった。

今回はここまでにします。

ちなみに話に出てきたアレは次の話で説明したいと思います。

それでは、皆さん次回もお楽しみにしてください。

## 第11話 手合わせを終えて

どうも、北方守護です。

少し期間が空いてしまいましたが、出来る限る更新していきます。

武昭と千冬が道場で手合わせを初めて、15分程経っていたが……

「へえ、さすが柳韻さんが言うだけありますね、これ程の腕前とは思いませんでした」

「私も、武昭の様な相手と会ったのは初めてだよ」

（ふむ……やはり千冬ちゃんでも武昭君の相手はキツイ様だな……

それに、武昭君はまだ“アレ”を使ってはいないからな……）

未だに手合わせをしている二人を見て柳韻は何かを考えていた。

そんな中……

「武昭……お前が言っていた『アレ』とは、その強さの事なんだな？」

「いえ、まだ使ってませんよ……千冬さんじゃ中々隙がありませんから使う暇が無いんですよ」

互いに竹刀を打ち合った二人は距離を取って話していた。

「そうか……なら『アレ』を見せてもらおうか」

そう言った千冬は竹刀を上段に構えた。

「今から私は武昭を一人の剣士として見る事にした。

そして、これが今の私が出せる最高の一撃だ!!」

「そうですか……だったら俺も本気を出させて貰います!!」

武昭が千冬を見ると同時に視線が鋭くなった。

「(なんだ、この気迫は!?面白い!!) 食らえっ!!」

武昭の気迫を感じた千冬は獲物を見つけた肉食獣の様に襲い掛かると同時に竹刀を振り下ろしたが武昭の姿が無かった。

「なっ!? 武昭は何処だ!!」

「千冬さん、俺はここですよ」

千冬が声のした方を向くと武昭が天井にいた。

「何だどっ!? あの一瞬で天井に飛び上がったと言うのか!!」

「千冬さん、ちゃんと防いで下さいよ! 飛天三剣流! 龍槌閃!!」

「くっ! 何っ!? 竹刀が!!」

千冬が竹刀を横にして武昭の一撃を防いだが勢いに負けて互いの竹刀が折れた。

「あらら、これじゃ、もう戦えないですね?」

「ああ、そうだな…… (あの時、武昭の竹刀が折れてなければ、私は……)」

「それでは、今回の手合わせの結果は引き分けとする」

「ありがとうございます」

柳韻に礼をした二人は更衣室に向かうと帰りの支度をした。



武昭が着替えを終えて道場を出ると先に出ていた千冬に声を掛けられると一緒に歩き出した。

「武昭、お前が良ければ私の家に寄っていかないか？」

「まあ、俺は構いませんよ。家に帰っても一人ですから」

「ん？武昭のご両親はどうしたんだ？」

「数年前に亡くなりました。それで今は知り合いの人が保護者になってくれています」

「そうか……それは悪い事を聞いてしまったな……」

「別に気にしなくて良いですよ、いつかは話す事ですから……」

（私は両親が失踪した時に一夏がいてくれたから頑張れたが武昭は……）

千冬は武昭の表情が一瞬だけ暗くなった事に気付いた。

「武昭、もしも辛い事があるなら私に話してくれ、話す事で楽になる事もあるだろう」

「ありがとうございます千冬さん、それで千冬さんの家はまだですか？」

「ああ、もう少しで着く、ここだ」

二人が話していると二階建ての一軒家の前に着いた。

「そうだ、私には弟が一人いてな武昭と同一年なんだ」

「へえ、俺と同一年ですか」

千冬が家に入ると千冬に似た一人の男の子が出てきた。

「おかえり、千冬姉。あれ？その子は」

「ああ、彼は道場に通っている子でな一夏に会わせたいから連れて来たんだ」

「そうか！俺の名前は織斑一夏って言うんだ!!よろしくな!!」

「俺の名前は宮本武昭だ。武昭って呼んでくれ」

「だったら俺も一夏で良いぞ!!」

二人は自己紹介をすると家に入った。

(ふふ、やはり同じ年だけあって仲良くなるのも早いな)

千冬は二人を見て笑っていた。

はいっ！久し振りの更新ですが、今回は武昭の二つ目の転生特典が出ました。

二つ目は“るろうに剣心の飛天三剣流”が使える事です。

漢字はうる覚えですので間違ってるかもしれませんが、この小説ではコッチで進

ませて頂きます。

それで今回でやっと原作の主人公が出ました。

これから、たくさん絡ませたいと思います。

それでは次回を楽しみにしてて下さい。

## 第12話 気まぐれ兎

武昭が篠ノ之道場に通う様になってから鍛錬を終えた後は千冬と一緒に織斑家に寄る事になっていた。

「おっ、一夏遊びに来たぞ」

「ああ、いらっしやい。千冬姉おかえり」

「ただいま、一夏。武昭、私を気にしないで遊んで行け」

武昭と千冬が家に帰ると一夏が出迎えたので2人は、そのまま中に入った。

「なあ、武昭って道場じゃ千冬姉と手合わせしてるって聞いたけど本当か？」

「まあ、千冬さんだけじゃなくて他の人ともしてるけどな」

「だが、私の相手が出るのは柳韻さんを抜かせば武昭以外じゃないじゃないか」

武昭と一夏が話していると着替えた千冬が話に入ってきた。

「千冬姉の相手が出るって……武昭ってそんなに強いのか!？」

「今まで20回ほど相手をしてるけど全部引き分けだな」

「その年齢で私と引き分けてる時点で私は負けだよ」

「それは俺が剣術を習ってるからですよ。それが無かったら俺は全敗ですよ」

武昭と千冬は互いに自分が負けだと話していた。

その後……

「まさか、家の鍵を落とすなんてなー」

一夏達と別れた武昭が家に帰ろうとポケットに手を入れると鍵が無かった。

「確か道場で着替えた時には確認してるから、多分あるとしたらここら辺だな

おっ、見つかった。さてと……ん？」

道場の前に落ちていた鍵を見つけた武昭が帰ろうとした時に何処かから何か聞こえてきた

ので音がする方に向かうと神社の敷地内にある林だった。

「この音は……この辺りからしてるな……」

「あぁーっ！なんで上手くないかないんだよー!!」

「この声は、何か聞き覚えがあるな……うわっ?!これは……木に見せかけたした入り口か」

武昭が林の中に合った木の一本に触ると幹に切れ目が出来て、そのまま出入り口

に変化した。

「階段があるな……鬼が出るか蛇が出るか、出たところ勝負って所だな」

武昭は、そのまま階段を降りていった。



一方……

「全く……もう少しすれば出来る筈なのに、なんで出来ないんだよー!!」

武昭が入った階段の先にある研究室らしき場所では機械のウサ耳を着けた女性がモニターを見ながら怒っていた。

「ああーあ、この私に出来ない事なんて……ん？侵入者だって？一体、何処の誰だよ

あっ！コイツは……」

女性は警報が鳴ったので監視カメラのモニターを確認すると武昭が映っていた。

「ふーん、なんでココに入って来たかは分からないけど……」

丁度いいや束さんのストレス解消をしておらおうかなっ」

束が近くに合ったボタンを押すと武昭が映っていたモニターの中に銀色のロボッ

トが映った。

「失敗作だけど、あんなガキ位ならすぐに始末出来るよね？」

モニターを見る束の表情は武昭を邪魔者の様に見ていた。



束が武昭に気づく少し前……

「多分、ここは前に会ったあの人が作ったんだろうなあ……おっ、広い部屋に出たぞ」

通路を歩いていた武昭が少し広めで天井が高い部屋に入ると同時に入って来た入り口が閉まった。

「ん？入り口が閉まったけど……他の出入り口は何処って……何だあれは？」

部屋を見てると武昭がいる場所の反対の壁が開いて銀色のロボットが出て来たが、その両手には剣があった。

「何か、凄い嫌な予感がつて！」

武昭がロボットを見てるとコッチを確認したロボットが剣で襲ってきたので慌てて避けた。

「チッ！事情は分かんないけど、襲ってくるなら容赦はしないぞ!!」  
武昭は構えると、ロボットに向かっていった。

## 第13話 兎との邂逅

武昭が束のいる秘密基地に入って銀色のロボットに会って……………

「ちっ！やっぱり生身じゃロボットの相手はキツイか!!」

〔シンニユウシャハイジヨスル〕

「まあ、たまには人間じゃない相手も良いか！食らえっ！貫・螺旋撃!!」

武昭の攻撃を受けたロボットが吹き飛ぶが、立ち上がって再び向かってきた。

「おおっと！今のじゃ、なかなかダメージを与えられないか!!」

「だったら、こいつならどうだ!?撃・爆砕!!」

武昭がロボットを殴ると同時に部屋内に轟音・閃光・爆煙が発生した。

一方……………

「何なの!?今のは!!まさか爆弾でも使ったの!?!」

モニターで武昭が居る部屋の様子を見ていた束は慌てていた。

「そんな筈は無いよ!ここの入り口には危険物センサーがあるんだよ!?!」

何者なの?あの子は?……………もっと知りたくなってきたよ!」



「ええ、もしも俺が同じ年なら付き合いたい位ですけど?」

「ふーん………そっか、そうなんだあー」

武昭の言葉を聞いた束が顔を上げると赤くして喜んでいたが凄いスピードで近くに来た。

「ねえ！君の名前はなんて言うの!？」

「お、俺の名前は宮本武昭って言いますけど………」

「ふーん、武昭かーだったら、これから君の事はタックくんて呼ばせてもらおうよ！」

「はっ? えっと、俺を解剖するんじゃないですか?」

「もーう、そんな事はもうしないよー！束さんの事を美人だって言ってくれたんだから」

「これからは私の事は名前で呼んでね」

「あつ、はい分かりました、束さん（なんで態度が180度変わったんだ?）」

武昭は束の変わり様に頭を捻っていた。

はい、久し振りに、この作品を更新しました。

今回は束さんが武昭に好意を持つ話でした。

これは作者の勝手な考えですが、ああいう天災とか言われる人達は

自分を真っ直ぐに褒めてくれる人には弱いと思います今回の話にしました。

それでは、次回を楽しみにしててください。

## 第14話 認められて

久しぶりの投稿です。

今回は、ちょっととしたオリジナルの話になります。

東は武昭を研究施設内の部屋に連れて来て話を聞いていた。

「じゃあ、タツくんが防衛ロボットを破壊したのは、その“仙術”を使ったからなんだね」

「ええ、亡くなった母親の遺言書にそれらを記した書物の場所が書いてあったのを探して覚えたんですよ」

「あっ そうなんだ……それでタツくんに聞きたい事があるんだけど……」

「仙術を教えてくださいって言っても俺は教えるつもりはありませんよ」

「えー教えてくなくても減るもんじゃないじゃない!!」

武昭の意見を聞いた東は頬を膨らませていた。

「俺が使う仙術は、その気になれば……人の命を奪う事が出来るんですよ」  
だから、誰にも教えるつもりはありません」

「でもでも、それだったらタツくんが命を落としたら、もう仙術を使える人がいなくなるんだよ!？」

「それでも構いません……そうなった時はそこまでだったって事ですから……」

「タツくん……なら、一つ私と賭けをしようよ」

「賭けて、何を賭けるんですか？」

「私が勝ったらタツくんは私に仙術を教える

タツくんが勝ったら私はもう仙術を教えてほしいなんて言わないよ」

「その条件なら俺に何も得が無いんですけど？」

「だったら……私がタツくんの言う事を何でも聞くよ……」

お金が欲しいって言うなら幾らでもあげるし、目の前から消えろって言うなら、その通りにする

だから……」

「東さん……わかりました、その賭けを受けます。その代わり賭けの内容は俺

が決めます」

「うん、タックくんは私の出した条件を受けてくれたから、私もそれを受けるよ」

「ありがとうございます。じゃあ、今日の所はこれで帰らせてもらいます。」

あと、こいつは俺の連絡先を書いたメモです」

「ありがとう、なら私も連絡先を教えるね」

武昭と束は互いに連絡先を教えあうと、自分の家に帰った。



武昭と束が賭けの約束をしてから数日後、二人は太平洋上にある無人島に来ていた。

「すみませんね束さん、こんな所を探してもらって」

「ううん、気にしなくても良いよ。それでこんな所で何をするの？」

「それを説明する前に……もう一つ頼んでたバリアーは大丈夫ですか？」

「うん、今、この島の周辺3km圏内はバリアーを張ってるから外からは何も感知されないよ」

「そうですか、じゃあ前に約束した賭けを始めたいと思うんですけど……」

これは一步間違えると命を落としますけど、本当にやりますか？」

「うん……私は構わないよ、それだけの覚悟はあるから」

東の目には強い決意が見えた。

「そうですか……なら、賭けを始め……ますっ!!」

武昭が合図を出したと同時に水の塊が東の頭を包み込んだ。

(ガバツ!?!急に何をするの!?!)

「それが俺の考えた賭けですよ……その水を取り除いて下さい。

ただし、何の機械も使わないで自分の力だけでしてください」それが東さんの勝

つ条件です」

(そんなの出来る訳ないじゃない!!)

「一つだけヒントを出すと、感じるより、考えろ」です。途中でギブアップするなら手を二回叩いて下さい」

そう言った武昭は近くにあった石に座った。

(ガボツ!こんな状況で、そんな事を言われても……あつ、何か息が苦しくなってきた……)

このまま手を二回叩いてギブアップした方が良いよね……………)

束は手を叩こうとしたが朦朧とした意識の中武昭の言葉を思い出していた。

（そう言えば……………タツくんは、感じるよりも考えろ”って言ってたっけ……………

これは多分だけど、タツくんが仙術で作りに出した物……………

だったら、どうにかすればこれを壊せるって事なんだ……………)

「おっ、何か雰囲気が変わったな……………けど、そこから先に進めない……………」

武昭は真っ直ぐに束を見ていた。

（感じるよりも考えろ……………タツくんが私の防衛ロボットを壊した時に聞こえてた

独り言……………

”気の制御”って言ってた……………私は、そんな事はある訳無いって思った……………

けど、タツくんが言う仙術を使う為には氣を感じないと駄目なんだ……………)

落ち着いた束は精神を集中させていた。

（昔に篠ノ之流の古文書を見た事があるけど、その中に氣の事が書いてあったっ

け……………

そうか……………そういう事なんだ……………だからタツくんは感じるよりも考えろって言っ

たんだ……)

「どうやら、言葉の意味がわかったみたいですね……けど、その先に進めるのかは東さん自身です」

(うん……何と無く体内を何かが巡ってるのを感じてる………これが氣なんだ……  
タツくんはこれを手に集めて爆発させてた………だったら私がする事は………)  
「ふーん、やっぱり天災って呼ばれてるだけあって、もう理解出来てるんだ」

(この水を取り除く、けどタツくんが使った仙術と同じなら私も危ないから………  
私がする事は………)

東が水に自分の手を当てると手に竜巻を起きて水を飲み込んだ。

「ハアハア……これで私の勝ち………だよね………」

水を取り除いた東が倒れそうになったのを武昭が支えたが東は氣絶していた。  
「はい、東さんの勝ちですよ。今は休んで下さい。」

水を取り除いた東が倒れそうになったのを武昭が支えたが氣絶していたのでそのまま膝枕をすると頭を優しく撫でた。

はい、今回はここまでにします。

今回はオリジナル設定として束を仙術使いにしました。

使う仙術もオリジナルにしたいと思っています。

それでは次回をお楽しみにしててください。

## 第15話 教わる事は…

束が武昭からの試験を受けて……………

「ん……………あれ？私は……………」

「あっ、束さん気が付きましたか」

「タツくん？……………そっか、私、仙術を教わろうとして……………」

（あれ？……………今、私の上にタツくんの顔がある……………って、まさか!?）」

「束さん、急に起き上がったら危ないですよ？」

「う、うん……………分かったよ……………（男の人の膝枕って初めてだけど結構良いかも）」

「それで、俺は束さんに仙術を教えるんですけど……………幾つか約束してください

“仙術で人を傷つける様な事はしない” 他人が悲しむ様な事をしない” そし

て……………

“力に溺れる事をしない” これらを守れますか？」

「タツくん……………うん、私篠ノ之束はそれを絶対に守るよ」

「ありがとうございます。それじゃあ、早速束さんに教えたいんですけど体は大丈

夫ですか？」

「あれだけ休めば大丈夫だよ。それで最初は何をするの？」

「まあ、簡単に説明すると俺が使う仙術は人間の体に宿る氣を操作して

自然現象を自在に操作する特殊能力……って、これは前に説明しましたよね？」

「うん、それは聞いたよ。けど自然現象を操作って……さっきの水の玉の事？」

「ええ、あれがそうです。他にも使えますけど、まずは基本技から教えますね。

今の束さんじゃ、それからでも難しいですから」

「ふっふーん、この束さんを見縊ったらダメだよ。すぐに基本技を覚えてあげるよ

！」

「そうですか、なら……おいしょっと。この岩を自身の拳で砕いてください」

「え？えっと……何も機械とかは使ったら……」

束は武昭が置いた岩を見て顔が引きつっていた。

「当然ダメですよ。まあ、束さんなら出来ますよ。俺は近くにいますから」

「えーい！私が自分から頼んだんだから、やってあげるよ!! くー!! !!」

「そいつを砕くには力も必要ですけど、氣を使わないと幾らやっても無駄ですから」

武昭は束に教えた。

「うーん……全然、砕けないよー」

「今日の所はとりあえず、ここまですておきますか」

「ねえ、タツくんは、その岩を砕く事が出来るの？」

「はい、出来ますよ。出来なかったら他人にやらせませんよ」

「じゃあ、見せてよ。それで出来なかったら私の言う事を一つ聞いてもらうから！

「良いですよ。行きます！崩・一点破!!」

「本当だ……私の防御システムを壊した時はモニター越したけど……」

こうして、自分の目で見たら本当だったんだって信じられるよ……」

「信じてくれて、ありがとうございます。それじゃあ帰りましょうか」

二人は帰ったが自宅に帰った束は隠しカメラを見ながら、武昭が岩を砕いた時の映像を分析していた。

はい、今回はここまでです。

今回の話では武昭が東に仙術を教える事にしました。

それでは、次回を楽しみにしてください。

## 第16話 変わり始めたもの……

武昭が束に仙術を教えると決めてから数日経ったある日の事……

「はい、手合わせは俺の勝ちですね」

「もう、束さんだって、仙術は覚えてるのにタックんに勝てないよー」

束の研究所内の一室で武昭と手合わせをしていたが束が倒されて負けた。

「まあ、仙術に関しては俺の方が一日の長がありますからね。

けど、束さんも少しずつ実力が上がってるから、このまま努力すれば良い所までいけますよ」

「そうなんだ……努力すればか……」

「ん？束さん、手を見たりして……何処か痛めましたか？」

「ううん違うよ。私は自分で言うのもおかしいけど昔から何でも出来てきたんだ……

だから努力するって事を今やって凄く充実してる感じがするんだ」

「束さん……昔誰かが言ってましたけど、天才とは1%の才能と99%の努力であるって言ってました」

「天才とは1%の才能と99%の努力であるか……前までなら何を言ってるんだって感じだったけど」

「今なら、その言葉を理解出来るよ」

「やっぱり束さんは天才ですよ。さてと今日もいつもの体術をして終わりますか」

「うん！わかったよタツくん!!（タツくんが居なかったら私は自分の世界に閉じ籠ったままだったけど」

、今なら他の人達とも関わりを持ってても良いかなって考えてるよ）」

束自身も笑顔で自分の心が変化している事に喜んでいた。



武昭が道場に来て1年程経った頃……

気になった事を箒と話していた。

「最近、千冬さんが来てないけど箒は何か聞いてるか?」

「ああ、父さんが言っていたんだがバイトを増やしたからだと聞いたぞ」



一夏が出て来たが何処か疲れた表情をしていた。

「ああ、箒から千冬さんが道場に来なくなったって聞いたからな。

ほら、差し入れた……だいたい疲れてるみたいだけど、どうしたんだ？」

「ありがたいな武昭。実は今千冬姉が風邪をひいてて看病してたんだ」

「そうだったのか……けど、一夏の方は大丈夫か？何と無く顔色が悪いぞ」

「これ位何でも無いよ……俺がいないと千冬姉の看病が出来ないからな」

一夏が家に戻ろうとすると膝が崩れたので武昭が支えた。

「全く……一夏が頑張るのは良いけど、お前が倒れたら誰が千冬さんの看病をするんだ？」

一人じゃ出来る事には限界があるんだから他人を頼る事をしろよ」

「悪いな武昭……なあ、武昭が良かったら少し手伝ってくれないか？」

「そんなの当たり前だろ？俺たちは友達なんだから」

武昭は一夏の肩を支えながら家に入った。

## 第17話 家族……

織斑家の千冬の部屋で……

「ん……どうやら眠っていた様だな……」

千冬が目覚めたが頭には濡れたタオルが置かれていた。

「一夏がやってくれたんだな……汗をかいているから着替えるか……」

「千冬さん、お粥を作ったから……」

「なっ!? た、武昭!?!」

千冬が着替えようとした時に武昭が部屋に入ってきて目が合うと互いに固まっていた。

「……千冬さん、ココに置いておきますから、冷めない内に食べてください」

「あ、ああ……って、ちょっと待て」

武昭が慌てて部屋から踵を返すが千冬に捕まった。

「なんで武昭がここにいて、私の部屋に入ってきたんだ?」

「い、いやー箒に聞いたたら千冬さんが病気だって言ってたので見舞いに来たんです

よー」

「そうだったのか、それには感謝しよう……だが」

「ち、千冬さん？何か肩がミリミリ言ってるんですけど……」

「嫁入り前の女性の部屋に黙って入るとはダメじゃないか？」

「い、いや一夏に聞いたらまだ眠ってるって聞いたから起こさない様にしただけなんです」

「そうか……だが、それはそれ、これはこれだ！」

「あぁーっ！千冬さん、止めてー！その関節は逆に……ギャー！！！」

その場を離れようとした武昭は千冬に捕まった。

一方……

「えーっと、これはちゃんと洗濯ネットに入れて……」

ん？今の叫び声は……うん、何も聞こえなかったから洗濯を続けるか」

一夏は何らかの音が聞こえても我関せずとして洗濯をしていた。



その日の夜……

「千冬さん肉ばかりじゃなくて野菜も食べて下さい」

「別に良いではないか、私は病み上がりなのだぞ？」

「全く……：おい、一夏、その魚火が通ってるぞ」

「ああ、ありがとうな武昭。アチチ！」

一夏と千冬は武昭が作った寄せ鍋を食べていた。

「それにしても千冬さん、バイトを増やすのはいいですけど

それで体を壊して倒れてたら元も子もないですよ？」

「武昭の言う通りだよ千冬姉」

「すまないな武昭、一夏……：だが、今のこの家で働けるのは私しかいないんだ……

だから、私が頑張らなければ、日々の生活も……：」

千冬は下を向いていた。

「だったら千冬さん、これを使って下さい」

「なっ!? すっげー金だなー!!」

「おい武昭！ お前、どうやってこれだけの金を用意したんだ!？」

武昭が多量の札束をテーブルに置いたのを見た一夏と千冬は驚いていた。

「こいつは両親の遺産の一部です。けど、これはタダであげる訳じゃないんです」  
「どういう事だ？武昭」

「今、ここにある金額は1千万円です。これを千冬さんに俺から貸します」  
「なら、私は武昭に1千万円の借金をする事になるのか」

「はい、けど返すのはいつでも構いません。」

月々に1万円なら1万円といった分割でも良いですし

宝くじが当たって臨時収入があつて一気に返しても俺は何も言いません」

「本当に、そんな条件で良いのか？武昭」

「ええ、けどもう少し俺からちよつとした条件を出します」

「どの様な条件だ？」

「それは……出来るだけ、一夏という時間を作って一緒に居てあげて下さい。  
今日、俺が一夏に会った時に軽く倒れそうになってたんです」

「なっ！それは本当か一夏!!」

「あ、ああ……千冬姉が俺の為に頑張ってくれてるのは知ってたから

俺が出来る事をしてただけど………」

「千冬さんにとって一夏がただ一人の弟である様に……………」

一夏にとっても千冬さんはたった一人の姉なんですよ」

「一夏……………悪かった……………」

「そんな、千冬姉が謝る事は無いよ。俺だって武昭が手伝ってくれなかったら倒れてたかもしれないだからさ」

「だから、俺も一夏と千冬さんの友達として俺が出来る事をしたんですよ。

それで千冬さん……………このお金は、どうしますか？」

「ああ、お言葉に甘えて受け取らせてもらおう」

「千冬さん、急にバイトを辞めると迷惑が掛かると思うので、そっちの方はお願いします」

「ふっ、それ位言われるまでも無い……………ありがとうな武昭」

「別にお礼を言われる事じゃないですよ。俺に今出来る事が有った、ただそれだけですから」

「そうか、わかったよ」

「それよりも、早く食べようぜ、鍋が冷めちまうぜ」

「そうだな。千冬さんこっちの豆腐も食べて下さい」

「うむ、なかなかの味だな」

「なあ、具が少なくなったから、入れても良いか？」

「ああ、構わないぞ、けど少し肉は多めに頼む」

その夜は3人で夕食を食べていた。

---

はい、今回はここまでにしました。

今回の内容はオリジナル設定にしました。

普通に考えて姉弟だけで生活してるなら、こんな事があるんじゃないかと思いききました。

それでは、次回をお楽しみにして下さい。

## 第18話 一夏と武昭

千冬の風邪が治って数日後……

「そうかい、ウチでバイトをしなくても良くなったんだね」

「はい、急にこの様に報告して悪いとは思うのですが……」

千冬は自分がバイトをしていた店に来ていた。

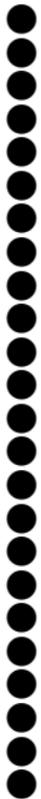
「いやいや、千冬ちゃんは学生なのに頑張ってくれてたから、少し心配してたんだよ。」

働き過ぎなんじゃないかって……

まあ、これからは自分の時間を過ごしたらいいよ」

「今までありがとうございます」

千冬はバイト先の責任者にお礼を言うと店を出た。



千冬がバイト先に行ってる頃……

「はあーっ！」

「はっ！隙有り!!」

「はい、そこまで。これで箒の3勝だな」

武昭は一夏を連れて箒の道場に来ていた。

「いったー少しは手加減してくれよー」

「本気で来いと言ったのは、そっちではないか」

「まあ、一夏と箒じゃ鍛錬してきた時間が違うからな」

武昭は二人に近付くとタオルを渡した。

「ああ、悪いな武昭」

「武昭、すまない」

「けど、一夏も鍛えていけば千冬さん位まで強くなれるかもしれないぞ？」

「それって本当か？武昭」

「だけど、それ位になるには沢山鍛えないと駄目だけどな。

まずは、箒に勝つ事を目標にした方が良いぞ」

「ん？なあ、俺が武昭に勝てる様には、どれだけ頑張れば良いんだ？」

「一夏、武昭に勝つ事は無理に近いぞ」

箒の言葉を聞いた一夏は少し機嫌が悪くなった。

「どういう事だよ箒、武昭は俺達と同じ年なんだぞ」

「確かに武昭は私達と同じ年だが、その強さは桁違いなんだ」

「そこまで言うなら、武昭！俺と勝負だ!!」

「ああ、俺は構わないぞ。箒、悪いが審判を頼む」

「私は良いが、一夏、本当にやるのか？」

「ああ！武昭がどれだけ強いかわかるか俺が確かめてやる!!」

「一夏、勇気と無謀は違うって事を教えてやるよ」

「では、始め!!」

箒の掛け声で武昭と一夏の試合が始まると同時に一夏が武昭に迫った。

「とりゃー!」

「ほう、さすが千冬さんの弟だけはあるな……けど!」

「なっ!?!ガハッ!!」

武昭は一夏の攻撃を躲すと、そのまま攻撃を加えて一夏を壁に吹き飛ばした。

「そ、それまで！一夏！大丈夫か!？」

試合を止めた箒は慌てて一夏に駆け寄った。

「ああ……大丈夫だ……それよりも、まだ終わっちゃいないぞ！」

「いや、終わりだよ……これを見ろ」

武昭が二人に見せたのは自分の竹刀だったが、それは真っ二つに折れていた。

「竹刀じゃ俺の力に耐えきれないんだよ、箒、これを柳韻さんに渡しておいてくれ」

「ああ、ちゃんと渡しておこう」

箒は武昭から壊れた竹刀と代金を受け取った。

その後、千冬が道場に来たので、武昭と試合をしたが引き分けに終わった。

---

今回はここまでです。

久しぶりに更新になりました。

今回の話は一夏と箒の出会いにしました。

簡単な流れとして

武昭が一夏を連れて道場に来る。

←

武昭が箒に一夏を紹介する。

←

互いに同じ名字があるので名前で呼ぶ事を武昭が提案する。

第19話 彼の使うもの……

武昭が道場に通う事になって、ある程度あった頃……

「ふう、今日はこれまでにするか……」

「くっそー……今日も勝てなかったかー」

「一夏は、そう言うが前よりは堪えられる様にはなってきたぞ」

「堪えられても勝てなかったら意味が無いんだよ」

試合を終えた武昭と一夏は箒からタオルを借り汗を拭いていた。

「まあ、一夏が鍛えてる様に俺も鍛えてるからな」

「一体、どんな鍛え方をしてるんだ……武昭は……」

「はっはっはっ、武昭君はウチとは違う古流剣術の使い手だからな」

3人が話していると胴着に着替えた柳韻と千冬が道場に入って来た。

「千冬姉、来てたんだ」

「ああ、久し振りに体を動かさうと思ってな」

「それならどうだい千冬ちゃん？久し振りに武昭君と手合わせしてみないかい？

勿論、2人の同意が得られたらただけ……」

「別に俺は構いませんよ」

「武昭がそう言うなら、私も良いですよ」

「では、武昭君も疲れてるだろうから30分後の休憩の後に手合わせを開始しよう  
それまでに千冬ちゃんを温めておくと良い」

「はい、分かりました」

柳韻の言葉に武昭と千冬はそれぞれの準備を開始した。



それから30分後……

道場の真ん中で向かい合わせで立つ武昭と千冬、少し離れた所に審判役の柳韻がいた。

「それでは、これから織斑千冬と宮本武昭の手合わせを行う。

決着方法は、どちらかが一本先取した方を勝ちとする。

反則をした場合は無条件で、その者の負けとする。

異論は無いか？」

「俺はありません」

「柳韻さん、異論では無いのですが、少し良いですか？」

「何だね、千冬ちゃん」

「この手合わせでは武昭に本気で来てもらいたいんだ、私達が初めて手合わせをした時の様に……」

「別に俺は構いませんけど……そうになると、俺はかなり動くんですよ？」

「ああ、私は本気の武昭と手合わせをしたいんだ」

「柳韻さん……良いですか？」

「うむ、互いが了承したのならば私は何も言う事は無い」

「そうですか……だったら……本気で行かせて……もらいます」

武昭が下を向き再び顔を上げるといつもの、のんびりした様な表情とは違う真剣な顔になっていた。

「（なんだ!? この気配は……）それが武昭の本気と言う訳か……」

「ああ……久し振りに本気で行かせてもらうからな……では」

「うむ……私が望んだ事だからな……」

「参る！」 「行くぞ！」

2人は柳韻が手を降ろすと同時にぶつかりあった。

「くっ！なかなかのスピードだな！」

「一応、速度に関しては自信がありますからね！俺からすれば千冬さんのパワーの方が厄介ですけどね!!」

「これでも武昭よりも年上だからな！それよりもお前はアレを使わないのか!?!」

「そこまで言うなら行きますよ！飛天三剣流！龍槌閃!!」

「そいつは以前に見た事があるぞ！」

「だったら！飛天三剣流!!龍翔閃!!」

「くっ！なるほどな、上空からの攻撃があるなら下からの攻撃もあると言う事か……」

「へえー……よく分かりましたね、けど、それを躲すって、どんな運動神経してるんですか？」

「さあな、それよりもまだ手合わせは終わってないぞ！」

「そうでしたね！」

2人は休まず攻めていた。

一方、道場の端で見ていた一夏は箒と話していた。

「なあ、箒！武昭のアレは反則じゃないのか!？」

「反則ではないだろう？それならば父さんが直ぐに止める筈だ」

「そうだけど……けど、飛び上がったたり下からなんて卑怯なんじゃ……」

「アレは卑怯なんかじゃないよ一夏君」

一夏が文句を言ってるの柳韻が近くに来た。

「父さん、アレは本当に反則じゃないのですか？」

「ああ、アレは千冬ちゃんが武昭君に本気を出す様に言ったからだし

元々、武昭君が習得してるのは剣道じゃなくて剣術だからね」

「柳韻さん、剣道と剣術ってどこが違うんですか？」

「剣道とは簡単に言えばスポーツであり剣術とは昔から伝わる技術だよ」

柳韻は一夏と箒に説明を始めた。

「剣道とは明確なルールが決められている物であり剣術とはルールが無い……言わば、何をしても良いと言う物だ」

「じゃあ千冬姉が言っていた武昭の本気って……」

「そうだ、武昭君は剣術を使っているんだ、しかもその流派は戦国時代に端を発する物と言われている……」

### 飛天三剣流

なんだ」

「飛天……三剣流……」

「それが武昭の使っている流派なんですか……」

「ああ……だが、今の武昭君が使っている物は飛天三剣流であって飛天三剣流ではない」

「飛天三剣流であって、飛天三剣流じゃない？」

「父さん、それは……………」  
「どうやら決着が着いた様だな……………」  
「え？……………」

柳韻の言葉に2人が武昭達を見ると千冬に面を入れている武昭の姿があった。

「それまでだ」

「はあー疲れたー……………」

「ふっ……………」  
「一夏と同じ年の武昭に負けるとはな、私もまだまだと言う所か……………」

「いやー千冬さんの勝ちですよ、俺はたまたま勝ったみたいな物ですから」

「たまたまでも勝ちも勝ちだ、ほら手を貸してやろう」

「ありがとうございます千冬さん」

「それでは、今回の手合わせは宮本武昭君の勝利とする」

「ありがとうございます」

2人は礼をすると、それぞれの家に帰った。



## 第20話やり方

武昭と束が出会ってから月日が経ったある日の事、武昭は束に呼び出され以前来た研究室に来ていた。

「束さんが話したい事があるから指定された場所に  
来てくれてって言われたけど、何の用だ？」

「おっ、ここだな。束さん、武昭ですけど……モガッ!?」

「あっ！来てくれたんだ！タツくん!!待ってたよー!!」

武昭が束に呼び出された場所に行くとき束が飛びついて武昭に抱き着いた。

（こ、この柔らかいのって、まさか束さんの!? あっ息が……）

「あれ？どうしたの、タツ……タツくん!？」

束は武昭の状態に気づくと慌てて蘇生行為を行った。

「ごめんねタツくん……嬉しかったから……」

「気にしなくても良いですよ、束さんは俺を助けてくれたんですから……」

（俺も良い思いをしたし……）

「タツくんが、そういうなら………それよりも、これを見てよ！」

東がキーボードを操作すると部屋の壁が開いて台座に真っ白なパスワードスーツの様な物が出てきた。

「東さん、これって……」

「フッフッフッ、これこそがこの東さんが発明した宇宙に行く為のパスワードスーツ！」

その名もインフィニット・ストラトス！略してISだよっ!!」

「これが、東さんが発明してた物なんですネ……」

「そうだよ！今からこれを作った時に使った資料類を持って発表をするんだ！」

「ちょ!?! ちょっと待った東さん!!」

武昭は慌てて東を止めた。

「東さん急にそんな事をして、他の人達が信じてくれる訳無いですよ」

「そんな事言ったって、ちゃんとして、こうやって数字とか出てるんだよ!?!」

「あくまでデータがあっても何か実物が無いと信じてくれませんよ……」

世間一般の人達は、そう言う物ですから」

「ブーだったら、どうしたら良いって言うのさ！」

「どうしたら……：……例えば誰かに、このISを装着してもらって

宇宙に行った映像を撮ってきて貰うとか月の石を採取するとか……

そういうのが良いんじゃないですか？」

「うーん……それもいい考えなんだけど……：……そこまで行うには

資金が足りないんだよねえ……：……」

束は気まずそうに言った。

「資金が足りないって……：……どれだけあれば良いんですか？」

「うーんとね……：……これ位かな？」

「うわっ……：……結構な額ですね……：……一応、俺の両親の遺産がありますけど……：……」

「ううん、そこまではお世話になる訳にはいかないよ……：……」

それはタツくんのご両親が遺してくれたものなんだから……：……

大丈夫だよ、この束さんに任せれば直ぐに稼げるから！」

束は胸を張って言った。

「じゃあ束さん、俺は帰ります」

「うん、また用事が出来たら呼ぶからねー」

武昭は束の秘密基地から出ると自分の家に帰った。

## 第21話 白騎士事件（前編）

束がISを作成してからしばらく経ったある日の夜……

「チッ！周りに海水が沢山あってもキツイものはキツイか!!

散撃・八岐水蛇!!（さんげき・やまたのおろち）」

海中に潜った武昭が複数の水の蛇でミサイルを破壊していた。

「けど！こんな事で弱音なんか吐ける訳ねえだろう!!

斬・水糸×6（ざん・すいし）」

決意をした武昭は新たに来たミサイルを水の糸で捕まえると、そのまま臆切りにした。

一方、束の秘密基地で……

「ちーちゃん……タックくん……ごめんね……私のせい……」

束がモニターを見ながら謝罪していた。

そのモニターには白いISを纏いバイザーで顔を隠した千冬と海中にいる武昭が

写っていた。

何故、この様な状況になっているのか……

武昭が今の様になる数時間前……

束は武昭と千冬を研究室に呼び出していた。

「束さん、急に俺と千冬さんと呼んだりしてどうしたんですか？」

「武昭の言う通りだそれよりも私は武昭が束と知り合いだっただ事に驚きなんだが」

「急に呼んでごめんね、実は 2 人に頼みたい事があるんだ……

これを見て…… 2 時間程前に来た物なんだけど……」

束は研究室のモニターに何らかの映像を映し出した。

それには、逆光で顔が見えない人物がいて喋り出した。

「始めまして篠ノ之博士。私は貴女にある提案をする為に連絡しました」

「束、こいつは誰なんだ？」

千冬の言葉に束は映像を一時停止した。

「私にも分からないんだ、分かっている事は私が作ったISに興味があるから連絡をしてきたみたいなんだ」

「ISの発表は、もう、やったんでしたっけ？」

「うん、前にタツくんに言われたから、どうしたら良いか考えたけど……」

「続きを流すね」

束が再生すると男は話し出した。

「その提案とは、貴女のISを世に広める為……私達が手を貸そうと言うのです……」

「新たな兵器として使う為に……」

そこで束は怒りながら映像を切った。

「ごめんね急に……けど、コイツの話はもう聞きたくなかったから……」

「それは分かりますよ束さん、このISは束さんが宇宙に行く為に作った物……」

「いわば、夢の翼なんですから……」

「まあ、あの様な事を聞かされて怒らない方がおかしいがな」

「ありがとう、タツくん、ちーちゃん」

「これを私達に見せたかったから呼び出したのか」

「違うんだ、ちーちゃん……本題はこれからなんだ……」

東はモニターに日本地図を映し出した。

「実は、1時間程前に約2千発のミサイルが日本に向けて発射されたんだ……」

「なっ!?!それは本当か!!」

「本当だからこそ、東さんは俺と千冬さんと呼んだんだと思いますよ」

「そうだよ、タツくんの言う通りだよ……」

ちーちゃんには、これを使ってミサイルを破壊してほしいんだ」

東がパネルを操作すると白い機体のISが姿を見せた。

「これは私が作り出した最初のIS……名前を白騎士って言うんだ……」

「まさか、私これがを使ってミサイルを破壊しろと言うのか!？」

「大丈夫だよ、ここから私が指示を出すし、ちーちゃんの運動神経なら問題は無いんだ」

「だが……私ではなく武昭では駄目なのか？」

「うん……何でか分からないけどISを動かせるのは女性だけなんだ」

「俺は前に実験したんですけど起動しなかったんです」

「だから、私が……そうだとしても私1人では……」

「大丈夫ですよ、千冬さんが1人でミサイルを破壊する訳じゃないですからですよ？ 束さん」

武昭が束に聞くと黙ってうなづいたが千冬だけは分からなかった。

「武昭、どういう事か教えてくれないか？」

「その話は後にしましょう、まずはミサイルの破壊が先です」

俺は、ミサイルの着弾範囲の南側に行きます！」

「待ってタツくん、これを持って行って」

ミサイルの着弾地点に向かおうとする武昭に束は小型モニターが付いたガントレットとゴツイローラーシューズを渡した。

「それは、ミサイルのレーダーと通信機能を搭載した物だよ」

もう一つは小型エンジンを組み込んだローラーシューズで時速40kmは出せる

代物なんだ」

「なるほど、これで移動しろって事ですねありがとうございます、東さん」

「おいっ！武昭……」

「ちーちゃん！時間が無いから急いで白騎士を纏って!!」

東は千冬を機体のハンガーに連れて行った。

## 第22話 白騎士事件（後編）

束の研究室を出た武昭はミサイルが着弾する30分前に指定位置に到着した。

「ここが、束さんの研究室で確認した場所か……………」

「タツくん！聞こえる!?!」

「束さん、はい聞こえます 千冬さんの方はどうですか？」

「うん、ちーちゃんの方も、もう少しで位置に着くよ」

「そうですか……………なら、俺は海中にいますね」

「タツくん……………ごめんね……………私よりも年下のタツくんに、こんな事を頼んだりし

て……………」

束の声からは悔しそうにしてるのが分かった。

「束さん……………確かに俺は年下です……………」

けど、それ以前に束さんは俺から教わってる……………いわば弟子の様なものなんです。

師匠として弟子が困ってるのに手を出さない訳にはいけませんからね」

「タツくん……………うん……………ありがとう……………」

〔東、武昭、どの様な事を話してるのかは分からないが……そろそろ予定時間になるぞ〕

千冬の通信を聞いた2人は気合を入れた。

〔ちーちゃんは私がサポートをするからミサイルを落として

タックンの方はちーちゃんが落とし損ねたミサイルをお願い〕

〔わかりました、千冬さんは無理をしないで下さい〕

〔それは分かっているが……本当に武昭はどうにか出来るのか？〕

〔はい……これでも、そこら辺の子供とは少し違いますんで……〕

おっと、話はこちらまでにしましょうか……お客さんが来たみたいですよ〕

武昭が目視、千冬がセンサー、東がレーダーとミサイルを確認すると同時に各々は自分がやるべき事を開始した。

・ ・ ・

武昭達がミサイルを落としている中……………

「ちーちゃん！残りのミサイルはちーちゃんの方が3発！タツくんの方は7発だよ！」

「ああ！こちらでも確認したぞ！」

「俺も見えました！これで最後なら大技で行きますか！」

喰らえ！集撃・蒼龍乱舞!!（しゅうげき・そうりゅうらんぶ）」

武昭が水中で両手を上に翳すと海水が大きな龍に変化して向かってきたミサイルを破壊した。

「フウ、これで全部のミサイルは破壊したか……………」

「ちーちゃん、タツくん、お疲れ様……………どうやら自衛隊がちーちゃん達を捕獲しようとしているみたいだね」

「どうするんだ？束逃げようと思えば逃げる事は出来るが……………」

「いえ、変に追跡されても面倒ですから俺にいい考えがあります」

武昭がある事を提案すると束と千冬は、それを受け入れた。

武昭と千冬がミサイルを破壊し終えて……………

「うーん……………そろそろかな？」

束が秘密基地の一室にいと壁にヒビが入っていき少しすると武昭と千冬が壁から出てきた。

「ふう……………どうやら見つからないで到着しましたね」

「悪いな武昭……………それで、これも合わせてどういう事か話してほしいのだが」  
千冬に睨まれた武昭は怯む事無く話し出した。

「ふむ……………その様な事情だったのか……………」

「ええ、それで俺は仙術が使える様になったんです……………」

「まあ、普通の私ならばふざけた事を言うなとする所だが……………  
あの様な事を見せられたらな……………」

千冬は武昭が開けた穴を見た。

「それで、武昭と束はいつ知り合ってたんだ？」

「俺の父さんと柳韻さんが学生時代の知り合いだったんです。」

それで、俺の剣術の修業の為に柳韻さんから誘われた時に会いました」

「最初に会った時には何の興味も持たなかったんだけどねー」

「ちょっとした事で東さんに俺の仙術がバレたんですよ」

「そうか……よく解剖や変な実験をやらされなかったな……」

千冬は武昭の肩を優しく叩いた。

「もうー！ちーちゃんとタツくんは私の事をどう思ってるのー!？」

「人付き合いが苦手な引きこもりの天災科学者」

2人の一言一句同じセリフに東は膝をついて落ち込んでいた。

「けど……これから大変な事が起こるかもしれませんね……」

「ん？武昭、それはどういう事だ？」

「いや、あの人物……便宜上黒服と呼びますけど……」

アイツの考えてた通りになったなあって……」

「そうか……黒服はISを兵器として考えていたが……」

ミサイルを落とした事で、凶らずもそうなってしまったと言う事か……」

「そうだね、ちーちゃんとタツくんの言う通りだよ……」

けど、私は諦めないよ……私の夢はISで宇宙に行く事なんだから……」

「東さん、もし俺に手伝える事があるならいつでも言ってください……」

俺が出来る限りの事をしますから……」

「フツ……ならば、私も手を貸そう……」

ミサイル破壊に参加した時点で私も共犯者なのだから……」

「タツくん……ちーちゃん……ありがとう……」

東は武昭と千冬に抱き着いたが2人は突き放す事をせず、そのまま抱きしめていた。

その後……

事件がTVなどで放送されたが……

その事件は「白騎士・蒼龍事件」と名付けられ歴史に名を残す事になった。

第23話 別れと……………

白騎士・蒼龍事件が起きてから色々と変わり始めた……………

まずは束がISを発表したが何故か女性だけしか搭乗出来ないとされていた。

それに関連して世界中でISが既存の兵器に取って代わる事になった。

更に男尊女卑から女尊男卑になりつつあった。

そして、ある夏の日……………

道場に来ていた武昭は話があると柳韻に呼ばれて母屋の部屋にいた。

「要人保護プログラムで家族がバラバラになるんですか……………」

「ああ……………武昭君には悪いんだが……………」

「いえ、気にしないでください柳韻さん……………辛いのは分かりますから……………」

「すまないね……………私や葉月は良いんだが……………箒が……………」

「箒がどうしたんですか？」

「いや……………プログラムの事を聞いてから部屋に閉じこもってしまったんだ……………」

「そうなんですか……俺が話してみましようか？」

「同じ年の俺にやら話せる事があるかもしれないですから……」

「そうだな……悪いが武昭君にお願いするよ……」

柳韻から許可を貰った武昭は箒の部屋に向かった。

箒の部屋に着いた武昭はドアをノックした。

「誰だ？父さんか母さんか？」

「いや、俺だよ武昭だ……」

「武昭か……何故、ここに来たんだ？誰かに言われたのか？」

「ああ、柳韻さんに話を聞いてな……なあ、何でこんな事してるか教えてくれな  
いか？」

「心配してくれるのは嬉しいが武昭でも話したくないんだ……」

「そうか……けど、家族には話せなくても他人だからこそ話せる事もあると思うん  
だ……」

「だから、箒……俺にだけでも話してくれないか？……」

武昭が言うのと暫し沈黙していたが少しずつ話し出した。

「実は……一夏と別れる事になるのが嫌なんだ……」

「そうだな……道場じゃ俺と一夏、箒は同じ年でライバルみたいなものだったからな……」

「それもあるが……その……私は一夏の事が……好き……なんだ……」

武昭は扉越しからでも箒は顔を赤くしてるのが分かった。

「なるほど……好きになった一夏と離れる事が嫌になったから、こんな事をしたのか……」

「だったら、正直に自分の気持ちを伝えたらどうだ？」

「うなっ!? そ、そんな事！ 出来る訳ないだろう!!」

「じゃあ、このまま一夏と離れた方が良いつて言うのか？」

「ウツ……武昭の言う事も分かるが……どうしても告白する勇気が出せないんだ……」

「箒……怖がるのは分かるよ……けどな、どんな事でも一歩踏み出さないと進む事が出来ないぞ……」

「武昭……だが、そうするには、どうしたら良いんだ？……」

箒の声には先程とは違って力が湧いているのが分かった。

「さっき柳韻さんからプログラムで、ここから引越す事を聞いたけど

まだ日にちはあるんだ……だから、これから一夏の家に行って告白するんだ」

「**だ、だが……都合よく、一夏がいるとは……それに2人きりになれるとは……**」

「それは、俺が何とかするよ、同じ道場に通う門下生だからな」

「**そ、そうか……すまないな武昭……**」

「気にするなよ、道場で箒と一夏を見てるとお似合いなんだから  
手助けもしたくなるんだよ」

「**な!?何を言っているんだ！お前は!!**」

箒はドアを開けて部屋から出てきたが顔が真っ赤だった。

「おっ、どうやら元気が出たみたいだな」

「**武昭が変な事を言うからだ!!**」

「変な事じゃなくて正直な感想なんだけどな……」

ほら、部屋から出たなら親に顔を見せて来いよ」

「あ、ああ……武昭……ありがとうな………」

「顔見せを終わったら風呂に入って

その後に飯を食べて、それから一夏の所に行くぞ」

「そうだな……まずは今の私が出る事をしなければな

簞は部屋を出ると居間に向かった。

篠ノ之葉月 柳韻の妻で東と簞の母親

年齢は柳韻と同じ年でスタイルは娘2人に劣らず良い。

これはオリジナルキャラです。

## 第24話 少女の想いと少年の誓い

部屋に引き篋もっていた箒は身体や髪を整えると武昭と共に一夏の家に向かった。

「だが……本当に私の想いを告げても良いのだろうか？……」

「箒……人が誰かを愛する事に必要な物は一つだけあれば良いんだ」  
恥ずかしかがってる箒に武昭が助言した。

「その必要な物とは何だ？」

「自分が、その人の事をどれだけ想ってるかだ……」

この場合は一夏に対する箒の想いつて事になるけどな」

「私が一夏をどれだけ想ってるか……か、それならば私は誰にも負けるつもりは無い！」

「そうだ、今の箒の想いや気持ち全部一夏に伝えるんだ……」

それは箒だけの誰の物でもない奴だからな……おっ、ここだ」

話していると2人は一夏の家に到着した。

その後……

「ほら、麦茶で良かったか？」

「ああ、ありがとうな一夏」

「すまない一夏」

一夏は訪ねてきた武昭と箒を家にあげると麦茶を出した。

「それにしても武昭と箒が家に来るなんて珍しいな」

「まあ、いつもは道場で会ってるからたまにはなと思ってな」

「そうか、それで今日は何で来たんだ？」

「ああ、今日来た理由は……「ただいま……おお誰かと思えば武昭と箒が来たのか」

武昭が話そうとした時に千冬が帰ってきた。

「あつ、おかえり千冬姉」

「「どうも、お邪魔してます」」

「ああ、いらっしやい……そうだ武昭、お前に少し話したい事があるんだが？」

「俺にですか？じゃあ悪いけど俺は席を外すよ（箒、頑張れ……）」

(ああ……ありがとうな武昭……)

武昭は箒に耳打ちをすると千冬と一緒にその場を離れた。

武昭 side……

千冬に呼ばれた武昭は一緒に庭に来ていた。

「それで千冬さんは俺に何の話があるんですか？」

「うむ、聞きたいのは武昭が使っていた仙術の事だ」

「それですか……前に束さんにも言ったんですけど俺は教えるつもりはありませんよ」

「そうなのか……それは束から聞いたよ、武昭の決意や想いもな……」

だが、それでも私は武昭から仙術を習いたいと思ったのだ……」

「聞きますけど、どうして千冬さんは其処までして習いたいんですか？」

「………今………私は何処か悩んでいるんだ………どうすれば強くなれるか………」

「それで俺の仙術を習いたいと………少し考えさせて下さい……」

仙術は、その気になれば人を殺す事が出来るんで………」

「そうか………そういう事ならば、この話はここまでにしよう………」

「そうですね今日は俺よりも箒の方が一夏に大切な話がありますからね」

「ふむ、それで武昭と箒が一緒に来たのか」

「はい……千冬さんは箒の気持ちに気付いてたんですか？」

「これでもお前達よりも長くは生きているからな……」

だが一夏は姉の私が言うのも何だがかかなりの唐変木だぞ」

「だから、俺は箒にここに来る前に言っておいたんですよ」

今の自分の正直な気持ちを全部伝えてやれって」

「そうだな、一夏にはそれ位しないと想いが通じないからな」

そう言った千冬は家の方を見ていた。

・ ・ ・

武昭と千冬が出て行った後……

「それで箒、今日はどうしたんだ？」

「あ、ああ……実は……（くっ……想いを伝えたいのに上手く話せない……）」

「ん？ 箒、顔が赤いけど暑いのか？」

「ち、違う！ 暑くはないっ!!」

「そうか？ 箒がそう言うなら良いけど………」

「すまない……（頑張るんだ……武昭も言っていたではないか……自分の想いを……）」

箒は武昭に言われた事を思い出すと深呼吸をして気持ちを落ち着かせた。

「一夏、私が今日ここに来たのは伝えたい事があるからだ」

「伝えたい事って？」

「ニュースとかで知ってると思うが白騎士・蒼龍事件に関してなんだ」

「ああ、あの謎の機体と水の龍がミサイルを撃ち落とした事件だろ？」

「そうだ未だにその者達の正体は知らないが、あの機体を作り出したのは

姉さんみたいなんだ……」

「姉さんて………束さんの事か!？」

「ああ………それで、その関係で私達家族は離れ離れになるんだ………」

箒が保護プログラムの事を話し出すと一夏は黙って聞いていた。

「そんな事になってたのか……………それが俺に伝えたい事……………」

「違う！それもそうだが、私が本当に伝えたい事は私の想いだ……………」

箒は再び深呼吸をすると一夏を真っ直ぐに見据えた。

「私、篠ノ之箒は一人の女性として織斑一夏の事が好きだ……………」

「えっ？箒が俺の事を好きって……………なっ!？」

一夏は箒の言った事を理解すると顔を赤くした。

「えっと、その……………その好きって意味は……………異性に対しての奴で良いんだよな？」

「ああ……………もし一夏に好きな人がいるのなら私は、それでも構わない……………」

「只私はこの想いを伝えなかったからだ……………ここから離れる前に……………」

「箒……………俺は……………今まで人を好きになつた事が無いから……………」

「こんな時にどう言ったら良いか分からない……………ごめんな……………」

「そうか……………一夏が気にやむ事は無い、これは私のケジメの様な物だから……………」

「箒……………俺がこんな事を言うのは間違ってるかもしれないけど……………」

ここから離れて再会する事があつたら……

その時に、もう一度俺に気持ち伝えてくれないか？」

「なっ!?! そ、それは……………」

「俺もわからないけど、また箒と会う事が出来たなら……………」

その時は、それを受け入れてると思うんだ……………だから……………」

箒を見た一夏の目には何らかの強さが見えた。

「一夏……………（そうだ、私が好きになったのは、その強さなんだ……………）」

分かった……………その時まで私は待たせてもらう……………」

「ああ、ありがとうな箒……………」

一夏が手を差し出したので箒は握手した。

それから数日後……………箒はその町から離れた。

## 第25話 鈴の音との出会い

この話の時系列としては鈴が日本に来て数日後とします。それに付随して武昭も学校を転校しました。

武昭達の前から箒が引越して暫く経ったある日の事……

「ふう、今日の掃除も終わったか……」

武昭は篠ノ之道場の掃除をしていた。

「まさか、柳韻さんから、この管理を頼まれるなんて……」

武昭はこうなった経緯を思い出していた。

箒が一夏に告白してから数日後、武昭は柳韻に呼ばれて道場に來ていた。

「急に呼び出してすまないね、武昭君」

「いえ、俺は構わないんですけど、柳韻さん達の方が大変なんじゃないですか？」

武昭が居間を見ると多数の梱包された荷物があつた。

「いや、私達の方は大体が終わってるから問題無いんだが……」

実は武昭君に頼みたい事があるんだ」

「俺に頼みたい事ですか？」

「ああ……それは私達の代わりに、この道場をお願いしたいんだ」

「え？俺が……ここの道場をですか？」

「そうだ、とは言っても正式には妻の妹である雪子さんに管理を頼んではいるんだ」

「ん？だったら俺はここに来て何をすれば良いんですか？」

「武昭君には女性が一人していると危ないから出来るだけ来て欲しいの」

武昭と柳韻の話にお茶を淹れた葉月が入ってきた。

「あっ、ありがとうございます、葉月さん」

「それでどうかしら？武昭君の方は」

「俺の方ですか……まあ、俺は構いませんけど……その妹さんの方はどうなんですか？」

「それに関しては私が、ちゃんと事情を話しておいたから、問題は無いわ

雪子も、特に構わないって言ってたし……」

「そうですね……だったら、俺も良いですよ。」

けど、その事を俺の保護者をしてる人に話してくれませんか？」

「ああ、それ位だったら構わないよ」

「ありがとうございます、すみませんけど少し待ってて下さい

〔もしもし、弾か？俺だけ陣さんか蓮さんに話したい事があるんだけど……〕」

武昭は自分の保護者をしてる人物に連絡を入れた。

その結果、武昭は許可をもらい篠ノ之道場の母屋に住む事になった。

「雪子さん、道場の掃除は終わりました」

「はい、ありがとうございます武昭君、やっぱり子供でも男の子が一人いると良いわね」

武昭が母屋に戻ると雪子が居間を掃除していた。

「雪子さん、俺も掃除を手伝いますよ」

「別に良いわよ武昭君、これ位なら私だけで大丈夫だから

それよりも買い物頼んで良いかしら？」

「ええ、それなりに力はあるから構いませんよ」

「ありがとう、ならメモに書いてある物を買ってきてちょうだい

それと、お釣りから何かジュースでも飲んできて良いわよ」

武昭は雪子からメモとお金を受け取ると買い物に向かった。

買い物を終えた武昭は帰路についていた。

「うん、ちゃんとメモに書いてあったのも買えたし、数量限定の奴もギリギリだったな」

「……い！お前はパンダなんだから笹を食べろよ!!」

「ん？何か向こうから変な声がするけど……」

武昭が声が出た方に行くと公園で数人の男子が長い髪の子を虐めていた。

「全く、ああいうのは見てられないな……」

とりあえずは、これを何処かに置いておかないとこれで良いか」

武昭は近くにあったコインロッカーに荷物をしまうと公園に向かった。

武昭が公園の方に気付く少し前……

「おい！お前パンダなんだから笹を食べろよ！」

「ソ、そんな…私はパンダなんかじゃ……」

「パンダだろ！リンリンって名前なんだから!!」

「なあ、この髪の毛って長すぎないか？」

「痛っ！離してください!!」

男子の1人が女子の髪の毛を掴んでランドセルからハサミを取り出した。

「よし！短く切ってやろうぜー!!」

「嫌！やめて下さい!!（誰か……助けて……）」

「おいっ！それ以上、その子に酷い事をするのはやめろ!!」

武昭は女子の前に立つとハサミを持っていた男子の手を捻り上げていた。

「痛っ！何するんだよ!？」

「誰だか知らないけど、お前には関係無いだろっ！」

「確かに俺は関係無いけど、目の前で虐められているのを放っておく事も出来ないんでね

大丈夫？」

武昭は少年の手を離すと少女に近づいた。

「エツと……その……大丈夫です……」

「ん？なんか言葉がたどたどしいけど、もしかして日本人じゃないの？」

「アツ……はい、最近中国から来た凰鈴音ファンリンインと言います」

「俺は宮本武昭って言うんだよろしく」

「おい！俺を無視するんじゃない!!」

「あっ！危ない!!」

武昭が鈴音と話していると離れた少年が近くに合った木の棒で殴りかかってきた。

「はあ……手加減してやれば、こうするのか！」

「ガハッ！」

武昭は後ろを向きながら少年に回し蹴りを放って少年を蹴り飛ばした。

「さてと……これ以上彼女に手を出すなら……俺が相手をするけど？」

「チッ！みんな！……ここから離れるぞ!!」

少年達はその場から離れた。

「全く……自分達よりも強い相手が来て逃げる位なら最初から、あんな事をしなきゃ良いのに……」

おっと凰さんは大丈夫？」

「は、ハイッ……ダ、大丈夫です……痛っ！」

鈴音が立とうとした時に右脚を抑えて疼くまったので武昭は慌てて駆け寄った。

「ちょっと見せてもらおうよ……これは少し触るけど我慢してね？」

「イッ！……ソレは痛いです……」

「ごめんね……けど、触った感じからすると折れてはいないけど腫れがひどいみたいだ……」

鈴音さんの家はどこなの？」

「えっ？私ノ家は商店街の中にある中華料理店ですケド……**フェッ!**」

鈴音は急に武昭にお姫様抱っこをされて顔を赤くした。

オリキヤラ

五反田 陣<sup>じん</sup>弾と蘭の父親で巖の息子。

五反田 蓮<sup>れん</sup>弾と蘭の母親。

武昭の両親の同級生。

篠ノ之雪子がどの関係か分からなかったの  
で、箒の母親の妹という事にしました。

## 第26話 鈴の音との再会

武昭が鈴を家まで送って行って……………

「ふう、ご馳走さまでした」

「好きなだけ食べて良いとは言ったのはコッチだけど……………」

「まさか、こんなに食べるとは思わなかったわ……………」

「武昭って沢山食べるのね……………」

事情を聞いた鈴の両親からお礼にご飯を食べていってほしいと言われたので食事をしていたが

その量に鈴達は軽く驚いていた。

「あっ、すみません。美味しいからって食べ過ぎましたか……………」

「なーに、逆にこんだけ食べてくれた方が気持ちいいよ。」

料理人として冥利につきるってもんだ！」

「父さんの言う通りね。ウチの娘を助けてくれたのに

これ位しか出来ないのはね……………そうだ！鈴音の彼氏になってくれないかしら!？」

「お、お母さん!?何を言ってるのよ!!」

「いやいや、そんな事で大切な娘さんを貰う訳にはいきませんよ。

確かに凰さんは可愛いですけど……」

(可愛いって言われちゃった……!!!)

武昭の感想を聞いた鈴は顔を赤くして照れていた。

その後、武昭は帰ろうしていた。

「じゃあ武昭君、いつでも来てくれ」

「はい、今日はありがとうございました」

「そう言えば武昭って何処のクラスなの?私は見た事無いんだけど……」

「ああ、俺は最近こっちに引っ越して来たんだ」

「あら、そうだったの、それで武昭君は何処に住んでるの?」

「今は篠ノ之神社に住んでいますね。前に住んでた人に、ちょっと頼まれ事があります。して。」

それじゃ、またな凰さん」

「あ、あのっ!私の事は鈴音って呼んで下さい!!」

「そうだな、俺も武昭って呼ばれてるからな、じゃあな鈴音」

武昭が去った後に鈴音は母親にからかわれていた。

翌日、鈴音のクラスで……

「はい、皆様はようさん、今日は転校生を紹介する」

（転校生？……ってもしかして……）

担任の先生が言うのと生徒たちがザワザワしていたが鈴音だけは心当たりがあった。

「よし入ってきてくれ」

「あっ……やっぱり……」

鈴音だけは入ってきた生徒を見て確信していた。

「じゃあ自己紹介を頼む」

「はい、宮本武昭と言います、皆さんよろしくお願ひします」

「よし、なら宮本の席は風の隣だ」

武昭は担任の指示で鈴音の横に座った。

「やっぱり転校生って武昭だったんだ」

「ああ、俺は鈴音が同じクラスだった事に驚いたけどね。

これからよろしく」

武昭と鈴音が挨拶をし終わると授業が始まった。

休憩時間……

「武昭!?! どうしてここにいるんだ!!」

「よっ一夏、まあちよっとした事情があってな」

武昭がトイレから教室に戻ろうとした時に気づいた一夏が声をかけてきた。

「その事情って何だよ？」

「それは学校が終わってからで良いだろ、そろそろ授業が始まるぞ」

武昭が言うのとチャイムが鳴ったので2人は自分たちの教室に戻った。

その日の放課後……

「ふーんそれで武昭はウチの学校に来たのか……」

「ああ、柳韻さんに頼まれたからな」

「武昭、一緒に帰りましょう……って、その人は？」

玄関で2人が話しているのと用事を終えた鈴音がそばに来た。

「ああ、彼は俺の友達で織斑一夏って言うんだ」

「なあ、武昭、彼女は？」

「彼女は凰鈴音って言って商店街の中華屋の娘さんだ」

武昭が言うると一夏と鈴音は互いに自己紹介をして下校した。

3人は下校しながら話していた。

「じゃあ凰さんはいじめられていた所を武昭に助けてもらったんだ」

「ええ、それで織斑さんはどうして武昭と？」

「俺は通っていた剣道道場に武昭が来てて、それからの付き合いなんだ。

それにしても、まさか武昭が箒のいた神社にいるなんてな……」

「ねえ、その箒って誰？」

「ああ、箒って言うのは俺が今世話になっている神社の娘さんだったんだ」

「へえ、そうなんだ……（まさか武昭って、その箒って子が……）」

「そう言えば一夏、箒とはどうなんだ？」

「ああ……どうやら束さんが何かしたみたいで、ちょっと前に手紙が届いたんだ  
(ん？ ちょっと前に手紙って……もしかして、その箒って子は織斑さんと？)」

「そうか、束さんだったら簡単だろうし……」

おっと、そういや今日は買い物頼まれてたんだってな、悪いけど俺はここで  
「だったら私も行くわ、途中までは同じだから」

「そうか、ならまた明日な」

3人はそれぞれの目的地に向かった。

## 第27話 感じる思い

鈴は武昭と帰りながら気になった事を尋ねた。

「ね、ねえ……さっきの話に出てきた箒さんで……もしかして織斑さんの……」

「まあ……彼女って訳でもないけど友達以上恋人未満って所だな」

「へえーそうなんだ……（だったら武昭に……って！私は何を考えてるのよ!!）」

鈴は自分が考えていた事をリアルに空想してた。

「ん？何か顔が赤いけど……大丈夫か？鈴<sup>りん</sup>」

武昭が鈴の額に手を当てて体温を計っていると慌てて距離を取った。

「だ、大丈夫よ！……そ、それよりも今、私の事を鈴で呼んでたけど……」

「悪いな、急に呼んだから咄嗟に出たからなんだけど……やっぱり、いつも通りの

呼び方で……」

「ううん！そう呼んで良いよ！そっちの方が呼びやすいし……」

「そうか、じゃあ、これからは鈴って呼ぶよ」

「ええ！よろしくね！武昭!!」

「へえ、鈴の笑顔って初めて見たけど結構可愛いんだな」

「ふえっ!? き、急に何を言ってるのよっ!!」

「ハハッ、悪いな変な事を言っておっと、俺は向こうだから、じゃあな」

「う、うん……じゃあ、またね……（武昭に笑顔を褒められちゃった……）」

武昭と鈴は、それぞれ帰ったが鈴は両親にからかわれていた。

武昭と鈴が学校に転校してきたから数年程経ち小6になったある日の事……

「武昭ー！ 次の授業に私が当たるから、ここを教えてー!!」

「ん？ どこだ？……ああ、この問題は……」

「それにしても……武昭と鈴って仲が良いよなあ……」

2人の様子を見ていた一夏が、そう言った。

「何言ってるんだよ一夏、お前だって仲が良いだろ、アイツと昨日だって……」

「まあなって……なっ!? 何で武昭がそれを知ってるんだよ!!」

「ハッハッハッ、俺にだって、それなりの繋がりがあるんだよ痛っ！ おいおい！

「一夏!!それはチョットヤバイ!!」

武昭が一夏にヘッドロックを掛けられているのを鈴は羨ましそうに見ていた。

「(はぁ……やっぱり男の子同士って仲が良いな……) あっ、2人共、先生が来たわよ」

鈴は担任が来た事に気付くと2人に声を掛けて自分の席に座った。

その日の放課後、一夏、鈴、武昭は3人で帰っていた。

「はぁー……そろそろ俺たちも小学校を卒業か……」

「そうか……もう、そんな時期なんだ……」

「中学になれば他の小学校からも来るから生徒もクラスも増えるぞー」

「そう言えば、そうだな……なあ武昭は中学でも道場から通うのか？」

一夏は自分が思った事を武昭に尋ねた。

「そうだな……雪子さんからは俺の自由にして良いって言われてるんだけどなあ……」

「もしかして元の家に戻るのか？」

「(！……そうか、そう言えば武昭って元々は、その道場の管理を任されてたんだっけ……) チクッ」

鈴は自分の胸に小さな痛みのような物を感じていた。

「いや、俺はそのまま道場から行くのかなって考えてるんだ、そっちの方が近いし」

「へえーそうなんだあ……（って、何で私、ホッとしてるんだろ……）」

「じゃあな武昭、鈴」

「ああ、明日学校でな一夏」

「一夏、またね」

3人は、それぞれ別れると帰宅した。

そして、それから少し経ち、武昭達は中学生になった。

## 第28話 新たな生活（中学生編）

武昭達が小学校を卒業して、中学校の入学式の日……

「さてと、今日から中学生か……じゃあ雪子さん行ってきました」

「ええ、行ってらっしゃい武昭君。ごめんなさい、今日は私が一緒に行けなくて……」

「仕方ないですよ、雪子さんにも用事があるんですから……」

それに、入学式には陣さんと蓮さんが来るって聞いてるんで

「そうなの……一度、顔合わせしておきたかったのだけど……」

「蓮さんは店をしますし陣さんは会社務めですからね……」

「だったら今日の入学式が終わったら道場に一緒に来ますか？」

「それも良いけど……私の方の用事がいつに終わるか分からないの……」

「そうですか、なら俺の方から今度会いたいって言うっておきます」

「ええ、お願いするわ……それよりも、そろそろ行った方が良いわよ」

「そうですね、じゃあ行ってきます」

時間を確認した武昭は道場を出て入学式に向かった。

武昭が学校に行くとき鈴と両親達が来ていた。

「よっ鈴、どうも海崙ハイロンさん春音シュンインさん」

「ちょっと！何で私には適当な挨拶で父さん達は丁寧なのよ！」

「だって、店に行けばたまに奢ってくれるし……」

「たかだか、そんなだけかい!!」

「こらこら、夫婦喧嘩は止めるんだ」

「そうよ、お父さんの言う通りよ」

「んにゃっ!?! な、何がふ、夫婦喧嘩よっ……」

顔を赤くした鈴は大きな声を出したが少しずつ小さくなっていった。

「おーい、武昭ー」

「よう弾、久し振りです、陣さん、蓮さん」

誰かが声を掛けたので見ると弾と両親が来ていた。

「久し振りだね武昭君」

「そうね、ちゃんとご飯は食べてるのかしら？」

「大丈夫ですよ蓮さん そうだ陣さんと蓮さんに聞きたい事があるんですけど、実は……」

武昭は雪子の事を2人に話した。

「その篠ノ之さんの言う通りね……私達も一度会わないと考えてはいたのよ……」

「お義父さんに頼んで日にちを調整してもらおうか」

「ええ、その方が良いわね武昭君 こっちが決まったら連絡するから篠ノ之さんに、そう伝えてくれるかしら？」

「はい、分かりました 「なあなあ武昭」 ん？何だ？弾」

「この女の子って……」

「ああ弾は初対面だったか、彼女は凰鈴音って言って俺がコッチの小学校に転校してからの付き合いなんだ。」

鈴、彼は五反田弾って言って、俺の幼馴染だ」

「あっ、初めまして凰鈴音って言います、鈴って呼んでください」

「ああ、俺は五反田弾、俺も弾で良いぜ」

自己紹介をしてる2人に武昭が声を掛けた。

「そうだ鈴、一夏には会ったか？」

「いいえ、まだ見てないわ私達も今さっき来たから」

「そうか、なら先に教室に行ってるのかもな、確認しに行くか」

「だったら俺も行くぜ、じゃあな父さん、母さん」

両親達と別れた団達は自分のクラスを確認に向かった。

確認した結果、武昭と鈴が同じクラス弾と一夏が同じクラスと書かれていた。

「同じ学校の生徒はいるみたいだけど、顔を見た事あるって位だな」

「そうね、まあ私と武昭は途中からの転校組だしね……（やった！また武昭と同

じクラスだ!!）」

武昭と話してた鈴は心中喜んでいた。

そんな中、弾が一夏と一緒にクラスに来た。

「よっ！武昭！鈴！中学生は別になったな！」

「ああ、そうだって……弾が居るって事は……」

「ああ、さっき武昭と鈴が話してたから自己紹介して直ぐに分かったんだ」

「俺も武昭が前に話してたのを覚えてたんだ……それにしても俺だけ別のクラスなんだ……」

「まあ、そっちには弾が居るから良いじゃない」

「鈴の言う通りだな、おっと、そろそろ自分の教室に戻った方が良いぞ」

武昭が言うと先生が来る時間が近かったので一夏と弾は教室に帰り、鈴は席に座った。

始業式が終わって、皆はそれぞれの家に帰宅し武昭が鈴の家族と歩いてる時だった……

「はい、分かりました……」ピッ

武昭だけは誰かと電話をしていた。

「武昭、どうかしたの？」

「ああ、雪子さんから今日は帰れなくなったから晩飯とかは自分でって言われたんだ」

「そうなんだ……じゃあ武昭が良かったらウチの店に来ない？」

「え？ 鈴が良くても海崙さんと春音さんが良いとは……」

「ウチは構わないよ嬉しい事は皆で祝えば良いんだよ」

「そうね、武昭君はよく来てくれるから家族みたいなものだし。」

「そうだ、ついでに、そのままウチに泊まっていきなさいよ、明日は土曜日で学校も休みなんだから」

「そうですか……じゃあお言葉に甘えて泊まらせてもらいます。」

着替えとかを用意したら店に行きますんで」

武昭は断りを入れると一度道場に戻った。

オリジナルキャラ

凰海崙（ファン・ハイロン）鈴の父親。

少し茶色の入った黒髪の短髪。

凰春音（ファン・シュンイン）鈴の母親。

背中まで伸びてる黒髪で出る所は出てるスタイルの良さ。

陣さんは五反田家に婿入りした設定です。

## 第29話 知った裏側

武昭達が中学に入学してから数ヶ月経った頃の下校中、武昭と一夏、鈴が話していた。

「ふーん……千冬さんが日本代表でモンドグロッソ……だったか？」

「ああ！第1回で優勝したから今度の大会に日本代表で出るんだ!!」

ISを使用した世界大会通称【モンド・グロッソ】の第1回大会が以前行われ、その時は千冬が優勝していた。

「それで箒からも「良かったな」ってメールが来たんだ」

「箒って一夏と武昭の幼馴染の子だけ？」

「正確に言うとお馴染みは一夏の方で俺は道場に通ってただけの付き合いなんだ」

「へえーそうなんだ そうだ武昭、今日はどうするの？」

「今日は雪子さんから早めに帰ってくる様に言われてるから、じゃあな」

武昭が帰ったのを皮切りに一夏と鈴も自分の家に帰った。

武昭 side

武昭が道場に帰ると雪子が出迎えた。

「ただいま、雪子さん」

「ええ、おかえりなさい武昭君、今日は早く帰ってくる様に言っていましたけど、どうしたんですか？」

「それなんだけど……」

「ひっさしぶり〜！タックくん!!」（モゴッ!?）

雪子が苦笑いをしてるとその背後から束が飛びついて来て武昭の顔が胸に埋まっていた。

「んにはははは〜久し振りに会いたいから来ちゃったんだ〜」

（た、束さん！柔らかい物が……あ……何か呼吸が……）

「た、束ちゃん！武昭君が何か動かなくなってるわよ!？」

「あーっ!!大丈夫!?タックくん!!」

雪子が武昭の様子に気付いた時には軽く息が止まり束も慌てていた。

しばらくして武昭は束から離されて呼吸を整えていた。

「ハアハアハア……危うく、この世界から居なくなる所でした……」

「うう……ごめんねタツくん……」

「いえ、ある意味男として嬉しかったですよ（全くですよ気を付けてください）」

「そっか……嬉しかったんだ……えへへ」

「武昭君……今、本音と建て前が逆になってたわよ」

雪子に言われた武昭は自分が言った事に気付くと天井を仰いで居た。

その後、雪子が部屋を出て武昭と束だけになっていた。

「うーん、それで束さんはどうして来たんですか？」

「それなんだけど、タツくんはモンド・グロツソが行われるって知ってる？」

「ああ、今日の帰りに一夏がそんな事言っていましたね」

「それに関係するんだけど、タツくんにもその時に行ってほしいの」

束はいつもと違う真剣に武昭に言った。

「束さんが、そう言うって事は……何か起こるんですか？」

「うん、私もまだ調べ始めたばかりなんだけど、何処かの組織が何かを仕出かすみたいなんだ」

「そうなんですか……それで今、判明してる事はありますか？」

「取り敢えず、今わかっているのは名前だけなんだけど……その組織は亡国企業ファントム・タスクって言うんだ」

「ファントム・タスクですか……まあ、その時も俺は暇ですから構いませんけど」  
「そっか！良かった！タツくんが受けてくれて!!じゃあ詳しい事は後日って事で!!」

東はその場から姿を消した。

東が姿を消すと入れ替わりに雪子が部屋に入ってきた。

「あら、束ちゃん帰っちゃったの？久し振りにご飯を作ってあげようと思ってたのに……」

「束さんも忙しいんですよ雪子さん……そうだ今の内に言っておきますけど、少ししたらちょっと旅に行つて来るんで」

「そう、わかったわ……じゃあ夕飯にするから武昭君はお風呂にでも入ってきて」  
「そう言われた武昭は浴室に向かい雪子は台所に向かった。」

## 第30話 ある日の思い出。

武昭が束から亡国企業の話聞いて日にちが経った、ある夏の日の日曜日の事……

「うーん……どうしても上手く出来ないな……」

武昭が何かのデータをパソコンに入力していた。

そのモニターにはインラインスケートの様なシューズに似た物が映っていた。

「一応、転生した時の特典でコレの使用時のデータや作成法は記憶にあったし材料もあるから作ろうと思えば作れそうなんだけど……」

「いかんせん、不器用な俺には難しいな……」

「武昭君、鈴音ちゃんが来たわよ」

「鈴が？特に今日は約束とかは無かった筈だけど……今、行きます」

雪子からそう言われた武昭は居間に向かった。

武昭が居間に行くとき鈴が座っていた。

「あっ、武昭急に来てごめんね」

「いや別に気にしてないよ、それで今日はどうしたんだ？ありがとうございます  
雪子さん」

武昭が鈴の前に座ると雪子が麦茶を出してきた。

「あ、あのね……実はお母さんから、これを貰ったの……」

「あら？それって最近リニューアルしたテーマパークのチケットじゃない」

「そう言えばTVでもやってた様な……」

「それでね……お母さんが知り合いから貰ったんだけど店があるから行けなくて、期限が明日までなの……だから……」

「俺は構わないけど……一夏とか弾の所には行かなかったのか？」

「あっ！一夏は何か用事があるみたいだし、弾は店を手伝うって言ったの!!」

「そうか、なら一緒に行くか雪子さんすみませんけど……」

「ええ良いわよ、特に今日は用事も無いから」

「ありがとうございます、じゃあ着替えてくるから待っていてくれ」

武昭が自室に行くとき居間には鈴と雪子だけになった。

「鈴音ちゃん、武昭君は少し鈍感な所があるから強気で行った方が良いわよ」

「んにゃっ!? ゆ、雪子さん!? な、何を……」

「よーし準備が出来たから行くぞーって……どうしたんだ？ 鈴、何か顔が赤いけど」

「な、何でも無いわよっ！ ほら！ 早く行きましょ!!」

「わ、分かったから引っ張るなよ、じゃあ雪子さん行ってきます」

「はい、行ってらっしゃい。うーんもしかしたら束ちゃんのライブになるのかしら？」

武昭と鈴の後ろ姿を見た雪子は楽しそうな笑顔を浮かべていた。

テーマパークに到着した2人は周りを見回していた。

「ふーん、夏休み前とは言え結構来てる人はいるんだな」

「そうね、それよりも何かアトラクションに乗りましょうよ！」

「そうだな……まずは、あれにするかって……鈴は絶叫系とかは平気なのか？」

「当たり前じゃない！ダメだったら、こんな所来ないわよ!!」

「そうか、なら今日は楽しむぞ」

（あっ……武昭の手って私よりも大きくて暖かい……） キュ

武昭に手を握られた鈴は、そのまま握り返してついでに行った。

久し振りの特典公開。

7つ目の特典は週刊マガジンに連載してたエアギアという作品内のエアトレックのデータと材料類です。

ちなみに武昭はエアトレックを作成出来ませんが、かなり時間が掛かります。

東が1種類完成させるのに2〜3日なのに対し武昭は2〜3ヶ月掛かります。

## 第31話 デート？

武昭と鈴はテーマパークに入ると何のアトラクションから遊ぶか考えていた。

「さーてと、まずは何から乗るかなあ……鈴は何が良いんだ？」

「そうねえ、なら最初はアレにしましょ」

鈴が指さした先にはジェットコースターがあった。

「おっ、早いからそんなに人も並んでないか鈴、怖かったら俺に抱きついて来て  
も良いんだぞ？」

「**なっ!?! そんな事になる訳ないじゃない! ほらっ! 早く行くわよ!!**」

鈴が赤い顔で駆け足で向かった後を武昭はついて行った。

その後、いくつかのアトラクションを乗った2人は休憩所で休んでいた。

「ふう、やっぱり連続して乗ると疲れるもんだな」

「そうね、武昭何か飲み物を買ってくるけど何にする？」

「俺は、あったらで良いから果物系のジュースで良いよ、それとも俺が行くか？」

「良いわよ、私が行ってくるから」

鈴は席を離れると飲み物を買いに向かった。

武昭は鈴が帰ってくるのを待っていたが、少し時間がかかっていた。

「遅いな、そんな遠くない場所だった筈だけど……」

武昭は鈴の所に行ってみた。

すると……

「おい、嬢ちゃん俺達と遊ぼうぜ」

「だから言ってるでしょ、私はアンタらなんかと遊ぶ気は無いです」

飲み物を買戻ろうとした鈴が数人の男達に絡まれていた。

「大体、私はね1人で来てるんじゃないのよ」

「だったら、その友達も「すみませんが、鈴に何か用ですか？」あぁっ？」

鈴の所に来た武昭は彼らの話に入ってきた。

「鈴、遅くなったから迎えに来たぞ」

「そう、ありがとう武昭……「ちよっと待てよ！」」

鈴は武昭が来たので行こうとした時に男の1人が怒っていた。

「え？なんで俺が待たないとダメなんですか？元々、彼女は俺と一緒に来てるん

ですあなた達の方が邪魔なんです」

「ウルセエんだよっ！このガキが!!グホッ!？」

絡んできた男が武昭に殴りかかってきたが逆に殴り飛ばされて気絶した。

「さてと……これ以上邪魔をするならあなた達も同じ目にあいますけど……どうしますか？」

武昭が軽く微笑みながら言う仲間達が気絶した男を連れて、その場から離れて行った。

「ごめんね武昭、迷惑かけて……」

「気にするなよ、悪いのはアイツらなんだから……ほら、次のアトラクションに行くぞ」

「え、ええ、そうね次の奴に行きましょう……（いつの間にか武昭の手ってこんなに大きくなってたんだ……）」

武昭から差し出された手を握った鈴は軽く頬を染めていた。

その後……

「やっぱり最後は観覧車よね……」

「ああ、そうだな……おっ、夕暮れがいい具合になってるな……」

2人は観覧車に乗りながら景色を見ていた。

ゴンドラに乗った2人は向かい合わせで座っていたが鈴は何かを決意した様な表情になっていた。

「（言うなら……今よね、けど……ううん、私は決めただから……）ね、ねえ武昭……聞きたい事があるんだけど……」

今、武昭って……好きな子って……居るの？……」

「それって……恋愛感情の好きって意味で良いのか？」

武昭の答えに鈴は黙ってうなづいたが少しの間沈黙があったが……

「居るか居ないかで言うところはないよ……そして鈴がそう言うって事は……俺の事が好きなのか？」

「うん……そうよ……私は武昭の事が好きなの……私が日本に来て助けてくれた時からずっと……だから今日は丁度いいキッカケだと思って……ねえ武昭は私の事をどう思ってるの？……」

鈴は赤い顔で真っ直ぐ見てきたのを武昭も真っ直ぐ見ていたが自身の考えを言っ

た。

「俺の気持ちを言う前に聞きたい事があるんだけど……鈴は俺が助けた時から好きだって言ってるけど……それは本当の恋愛感情なのか？」

もしかして俺が助けた事を勘違いしてるんじゃないのか？ちゃんと考えてみるんだ……」

「（私は本当に武昭の事が好きなの？……私が好きになったキツカケはいじめられてた時に助けてくれたのが武昭だったからよ……」

けど、それは本当に？……ううん、それだけじゃないわ……私は憧れでとかじゃない……心から武昭の事が好きなんだ……」

そっか……今なら本当に心の底から言えるわ……（武昭……最初は憧れみたいな物があったかもしれないわ……けど、私は本当に武昭の事が好きなの……1人の男の子として……）」

「鈴……ありがとうな、俺の事をそんなに思ってくれて……」

武昭は鈴の横の席に行くと言を肩を抱き寄せた。

それから2人は下に着くまで、そのままだった。

## 第32話 鈴音との別れ。

時間が経って、武昭達が中学生3年生になった、ある日の事……

「えーっと、皆さんのクラスメイトである鳳・鈴音さんが家庭の事情により転校する事になりました」

担任の先生が帰りのHRでそう言うのと隣にいた鈴が前に出て来た。

「急に、こんな事になって驚いている人も居ると思います。ですが転校する迄はただ日にちがあるので宜しくお願いします」

鈴はそう言うのと頭を下げた。

下校時……

武昭と鈴の2人きりで帰っていた。

いつもなら一夏や弾、数馬といった他の仲間も一緒に帰るのだが、今日は皆が空

気をよんでいた。

「おいおい、鈴、転校するって本当なのか？」

一緒にいた武昭話しかけてきた。

「ええ、ちよつと親の都合で転校する事になって、私はお母さんと一緒に中国に帰るの……」

「え？中国に春音さんと帰るって……海崙さんは一緒じゃないのか？」

「うん……あのね……お父さんとお母さん……離婚する事になったの……」

「離婚って……俺や一夏は何回か店に食べに行ったけど、そんな雰囲気なんて感じなかったぞ」

「そうよね……私も、そう感じてたんだけど……なんでだろう……」

そう言った鈴は黙ったまま歩いていた。

「うーん……もしかしたら何らかの事情があるんじゃないのか？」

「その事情って何よ？私にも話せない事なの？」

「なあ鈴、俺も一緒に店に行つて良いか？」

「え、ええ、お父さん達も武昭ならいつ来ても良いって言うてるけど……」

「そうか、分からないけど俺になら話してくれるかもしれないから、けど……」  
「言いたい事は何となく分かるわ……だけど何か嫌なの、私だけが何も知らないって言うのが……」

鈴の心中を察した武昭は一緒に鈴の親がやってる店に向かった。

店に着くと鈴の両親が武昭がいた事に気付いた。

「おお武昭君、今日は鈴音と一緒に帰ってきたのかい。空いてる所に好きに座ると良い」

「ええ、鈴から海崙さん達が離婚するって聞いたんで」  
海崙に言われた武昭は椅子に座った。

「そう……武昭君にも心配かけさせちゃったみたいね……ホラ鈴音、着替えて来なさい」

「ええ、分かったわ、私が来るまで待つてなさいよ武昭……」

春音に促された鈴が自分の部屋に行くのと店内には武昭達3人しかいなかった。

「海崙さん、春音さん……隠し事は苦手なんで俺はストレートに聞きますけど……離婚の原因は……何ですか？」

武昭が真っ直ぐな目で2人を見ると観念した様に話し出した。

「ふう……武昭君には誤魔化そうとしても無理みたいね、あなた……」

「ああ、分かったよ春音……武昭君、実は私達が離婚するのは……私に癌が出来たからなんだよ」

2人の話を聞いた武昭は何処か聞かなきや良かったといった表情になると天を仰いだ。

「そうだったんですか……言い辛い事を聞いてすみませんでした……」

「いや、隠し事をしてた私達の方が謝らないと……」

「そんな、頭を下げないでください……それよりも、何でこの事を鈴に話さないんですか？」

「鈴音に話しても悲しませるだけだから……なら真実は話さないで私達が離婚すれば「ふざけないでください」……武昭君？」

「確かに海崙さんは癌かもしれません……けど、それを鈴に話さないのは違います……」

鈴がコレを聴いたら悲しみます……

けど、どんな事だろうとも……親の最後にはいたいんですよ……」

（そう言えば……武昭君はご両親を小さい頃に……）

武昭が泣きながら声を震わせているのを見た春音は以前に聞いた事を思い出していた。

「だから海崙さん、春音さん……鈴が、どう思ってもこの事は隠さないでください……」

俺がそうだったから……」

「武昭君……ありがとう、そこまで言ってくれて……春音、悪いが鈴音を呼んできてくれ」

「ええ、分かったわ……」

海崙に頼まれた春音は鈴音を呼びに行くと隠していた事を話した。

その結果……

「ありがとう……武昭……」

「鈴……俺は感謝される様な事はしてないよ……隠してた秘密をバラしただけだ」話を聞いた鈴は泣きながらも感謝しながら武昭に抱きついてた。

「あらあら、あなたコレは鈴音を日本に残した方が良いかもしれないわ……」

「ああ、あれ程に好き合ってるなら、そっちの方が良いのかもな」

それを見た海崙と春音は武昭と鈴の様子を見てニヤニヤしていた。

その後……

「結局、春音さんと鈴は中国には帰る事になったんですね」

「ええ、もう学校の方には転校するって言ってしまったからね」

「それよりも鈴音、あんたは本当に私についてくるの？日本に残っても構わないわよ？」

「良いわよ！私はお母さんと一緒に行くんだから!! (アァーッ！もう、恥ずかしくて武昭の顔が見れないじゃない!!)」

これからについて武昭を加えた4人で話していたが鈴は顔を真っ赤にしていた。話の結果、海崙は日本に残り春音と鈴音は中国に戻る事になった。



## 第33話 鈴との約束。

その後、鈴が中国に行く当日……

「鈴……向こうに帰っても元気でな……」

「分かってるわよ、あんたこそケガするんじゃないわよ」

空港に来た武昭は鈴の所にいた。

「あなた、私が居ないからって浮気なんてするんじゃないわよ？」

「おいおいおい、俺は病気の身体なんだぞ」

「そうだったわ、ねえまだ時間があるから何か買いに行かない？」

「ん？……ああ、そうだな悪いが武昭君、私達はちょっと買い物に行ってくるから」

春音は海庵に目配せをして武昭と鈴の2人きりにした。

（武昭君に伝えるなら今が良いわよ）

（うにゃっ!? な、何を言ってるのよっ!!）

春音は行く前に鈴に耳打ちをしてそれを聞いた鈴は顔を真っ赤にして頭から湯気が出ていた。

2人が離れて武昭と鈴はラウンジのベンチに隣り合って座っていた。

（武昭と2人きりになれたのは良いけど何を話したら良いのよっ!?）

「なあ鈴……考えてみたら俺と鈴が出会ってから、結構な時間経過してきたよな……」

「フェツ!? そ、そう言えばそうね……初めて会ったのは私がいじめられていた時だったわ……」

「そこを俺が助けて転校したら同じクラスで隣同士の席になってな……」

「そうそう、それから今までこうして居るのよね……ねえ、武昭……」

「ん? どうしたんだ? 鈴」

「あの、その……あのね、私ね今、料理が上手になりたいから練習してるの……」  
鈴は顔を赤くしながら武昭の方を向いた。

「だから……私の腕前が上がったら……酢豚を毎日食べて欲しいんだけど……どう?」

「えーっと……鈴、それは……あの、その……日本で言う毎日味噌汁を飲みたいって事と同じ意味で良いのか?」

「えっ、あのっ、そのっ……もーう!! そうよ! それと同じ意味よ! それでどう

なの!？」

「俺の返事は……鈴みたいにかわいい女の子から、そう言われて嬉しいよ……」

「ならっ!」「けど、今はまだ早いと思うんだ……」そうなんだ……なら……」

「勘違いしないでほしいんだ……言ったら?今はまだ……」

「えっと、どういう事?」

「だから……今度、鈴と再会する時までには俺は自分の気持ちを確認しておきたいんだ……それでも良いか?」

「武昭……うん、良いわよ……私だって長い間考えたんだから……」

「そっか……ありがとうな鈴」

「別に良いわよ気にしなくて……けど早く決めないと武昭より良い人を好きになっちゃうわよ?」

「だったら俺も鈴より良い女性を好きになるよ」

2人は顔を見合わせると互いに笑い合った。

その後、時間が来たので鈴達が飛行機に乗り込もうとした時だった……

「そうだ、鈴。お前に渡す物があるんだった」

「もう、渡すならさっきに渡せば良いじゃないの？それで忘れ物って……フェツ  
!？」

武昭に呼ばれた鈴が近くに行くのと、そのままおでこにキスをされた。

「な、な、な、何するのよっ!？」

「いや、昔に父さんが生きてる時に……病気の母さんにした事があるって思い出したから……」

鈴は顔を赤くして武昭は頬を染めながら指でポリポリと搔いていた。

それを見ていた周りの人達は優しい笑顔で見っていた。

その後……

「全く……武昭って大勢の前であんな事をしなくても……」

「その割にはすごく笑顔じゃない？」

飛行機に乗った後鈴は春音に揶揄われていた。

「なっ!？それは、その……」

「これは武昭君に責任をとってもらわないといけないわねえ……」

中国に到着するまで鈴は春音に色々と言われていた。



## 第34話 ドイツにて

鈴が中国に転校してから日にちが経ったある日……

「うーん……ここがモンドグロツソの会場になるドイツか……」

「結構冷えるんだな……」

一夏と武昭はドイツの空港に来ていた。

「えーっと確か、千冬姉が迎えが来てる筈だけど……」

「あっ、あれみたいだぞ一夏」

武昭が指差した方を見ると千冬が車の所にいた。

「千冬姉、来たぜ」

「千冬さん俺も呼んでくれて、ありがとうございます」

「気にするな武昭は私にとってはもう1人の弟の様な物だからな、それよりもホテルへ向かうぞ」

2人は千冬に促されて用意されてあった車に乗り込んだ。

車に乗って暫くすると宿泊するホテルに到着した。

「うわあ……凄い立派なホテルだな……」

「多分だけど、ここはモンドグロッソに出る出場者の関係者用だと思うぞ」

「そうだ、武昭の言う通り、このホテルは関係者用で他国の選手等もいるからトラブルを起こす様な事をするなよ」

「分かりました」

「分かったなら良い、では部屋へ向かおう」

一夏と武昭は千冬の案内で泊まる部屋に向かった。

部屋に到着して中を見た一夏と武昭は言葉を失っていた。

「なあ、一夏……ここって……ドイツだったよな？」

「ああ……確かにドイツの筈だ……なのに……」

「「なんで！日本の部屋と同じ状態なんだ！（なんですか！）」

ホテルの部屋とは思えない程に散らかった。

「い、いや、あのな……試合の打ち合わせや練習なんかで時間が……」

「武昭！袋を買ってきてくれ!!」

「分かったよ、大きめの奴で構わないな、千冬さんこのホテルのフロントで両替は可能ですよね？」

「ああ、他国の選手も多いからな」

「じゃあついでに何かいるか？」

「だったら洗剤とかも頼む、俺は出来る事をやっておくから」

一夏は部屋の掃除、武昭は千冬と一緒に買い物に向かった。

少しして……

「ふう……とりあえずはこんな所だな……」

「そうだな、出せるゴミは全部出したし洗濯物は乾燥させるだけだからな」

「すまないな2人とも……ドイツに来たばかりでこんな事をさせて」

作業が終わった2人が汗を拭っていると千冬が頭を下げた。

「お礼と言ってはなんだが、近くにあるレストランを予約したから食事に行こう」

「ありがとうございます、一夏ドイツに来たからには」

「そうだな出来るだけ本場の味を覚えていくぞ」

2人はどこか燃えていた。

食事が終わってホテルに帰ってきた3人は、それぞれに用意された部屋で休んでいたが……

「ああ、束さん？こっちはとりあえず何も無いよ」

「そっか、ありがとうねタツくん」

武昭は束に連絡を入れていた。

「タツくん、私が頼んでおいてなんだけど……危ない事だけは気をつけてね？」

「まあ、それは相手次第ですよ、それじゃもう遅いんで……束さんも早く寝た方が  
良いですよ？」

「う、うん……分かったよタツくん、じゃあね……（タツくんが私の心配を……  
えへへ）」

武昭に心配された束は顔を赤くして喜びながら通信を切った。

ちょっととした設定。

ホテルでは大会の関係上、選手の部屋には家族が選手本人が許可した人しか入れない。



2人は席を離れたが物陰から何者かがそれを見て誰かに連絡をしていた。

用事を終えた2人が客席に戻ろうとした時だった……

「すみませんが、ちょっと良いですか？」

「俺達に何か用ですか？」

1人の男性が声を掛けて来たので武昭が対応した。

「はい、実は……ちよつと私達に書いて来てほしいんですが……ガッ!？」

「一夏！コイツ……いや、コイツら何かする気だ!!」

男性が何かを取り出す様に右手を懐に入れたと同時に武昭が殴り飛ばして一夏を連れてその場から離れると隠れていた者達が出て来たので避けながら逃げ出した。

「おい！武昭！一体何だよ！アイツらは!？」

「さあな！けど、どう見ても普通の奴等には見えないよ！（もしかしてアイツらが束さんの言ってた奴等なのか？）」

「ガキ共！待ちやがれ!!」

一夏が武昭に事情を尋ねるが説明しながらも心当たりを考えていた。

そんな中、街中の時計を見ると決勝戦が始まっておりいつの間にか町外れまで逃げていた。

「チッ！試合が始まったみたいだな！」

「くそっ！折角、会場で見たかったのに……」

「しょうがないか……一夏そいつ貰うぞ」

武昭は一夏が買ったペットボトルを手に取ると追いかけて来る奴等に中身をぶちまけた。

「うわっ!?こんな物で俺達を何か出来るなんてガキの考えだな！」

「一夏！俺から離れる!!さい・いかづちばしり砕・雷走!!」

武昭が手を地面につけると電気が発生し、ぶちまけた中身を伝って奴等を感じさせた。

「どうやら、コレで追いかけて来るのは終わったみたいだな」

「武昭……今のは一体……何だよ?……」

「まあ、今はまだ聞かないでもらえるか？ いつか話すから」

「……ああ、分かったよ、けど話せる時が来たら話せよ」

一夏は武昭の表情から何かを察して話を終えた。

「それよりも早く会場に戻らないと……一夏！ 危ない！！ ガハッ！！」 ドゴッ！

「痛っ！ 急に何するんだ……って武昭！！」

「へっ！ 私らの邪魔をするからこう言う事になるんだよ！！」

2人が話していると物陰から何かが出て来たので突き飛ばされた一夏が武昭を見るとISを纏った何者かに殴り飛ばされ近くの建物の壁にめり込んだ。

「チッ！ 油断したぜ……一夏！ 早くここから逃げろ！！」

「馬鹿野郎！ 武昭を放って「 teme me がいたら邪魔だっつんだよ！！」 なっ！！」

一夏に叫ぶと武昭は壁から抜け出した。

「バカは teme me だよ！ ここから逃すと思ってるのかよっ！！」

「一夏！ お前がやる事はここから離れて助けを呼ぶ事なんだよ！！ その時間は俺が稼いでやる！！ 貫かん・らせんげき・螺旋撃！！」

「なっ！！ ISを纏ってる私を吹き飛ばしただっ！！」

武昭の攻撃を食らった操縦者はその威力に驚いていた。

「今のうちに行きやがれ!!」

「武昭……助けを呼んでくるまで無事でいろよ!!」

一夏は悔しい顔をしながら、その場から離れた。

「さてと……来やがれよ!この程度でやられる訳ねえだろっ!!」

武昭が叫ぶと操縦者が向かってきた。

「生身の体でこんな事が出来るなんて面白えじゃねえか!クソガキ!なんて名前だよ!!」

「俺の名前か、俺の名前な宮本武昭だ!テメエの名前も教えてもらおうか!!」

「良いぜ!私の名前は亡<sup>フアントムタスク</sup>国機業実働部隊所属オータム様ってんだよ!」

互いに名乗りを終えるとそのまま衝突し始めた。

「喰らえオータム!貫<sup>かん・らせんれんげき</sup>・螺旋連撃!!」

「カッ!宮本ーっ!!どうやれば生身で機体にダメージを与えられるんだよ!!」

「手の内を明かす訳ねえだろうがあ!!行くぜ弾<sup>だん・そうしょう</sup>・双掌しまった!足が!!グホッ!!」

武昭が技を出そうとしたがダメージを喰らいすぎた為、足が絡れてしまい、その

隙に攻撃を受けて倒れた。

「へっ、幾ら機体にダメージを与える事が出来ても自分のダメージだけではどうにも出来なかったみたいだな!!」

オータムは倒れた武昭の頭を踏みつけた。

「さてと……このまま頭を潰してやるよ！じゃあな！宮本武昭!!」

「(くそっ……このまま死んで……たまる……) ……かってんだよ！ウォォォー！」

「そんな叫んだ所で……なっ!? 傷が!? グハッ!!」

オータムが武昭の頭を踏み潰そうと力を込めた時に武昭の傷が回復していき戸惑っていると再び殴り飛ばされた。

「テメエ！何を!? 速度が!! クッ!!」

ドゴォーン!!

「嘘だろ? ……おいおいおい……」

武昭がそのまま向かってきたのを寸前で何とか避けたが、殴られた建物が全壊したのを見て冷や汗を流した。

「宮本……テメエ本当に人間かよっ!!」

「……………撃・爆碎……………」

「へっ！そんな攻撃くらいで！（なんだ!?何か嫌な予感がしやがる!!）」

オータムは武昭の攻撃を受けようとしたが何かを感じたので受けようとはせずそのまま避けると当たった壁が爆発し武昭が爆煙に巻き込まれた。

「避けなくて、あのまま受けてたら……………しかも、あれだけの傷を負ってるなんて……………」

〔聞こえる? オータム〕

オータムが、そこを見てると爆煙が晴れて武昭が出て来たが殴った拳からは流血し腕は外からでも分かる程に骨が折れていた。

そんな中、機体に通信が来たので対応した。

「ああ！聞こえてるぜ！スコール!!」

「どうしたの？織斑一夏が織斑千冬に事情を説明して、そっちに向かっているわよ？」

「うなっ!?チキショー!!途中までは上手くいったんだけど、邪魔者が居たんだよ!!おっと!!」

〔邪魔者?もしかして、織斑一夏と一緒にドイツに来た子かしら?〕

「ああ！こいつは何をしてるか分からないけどISを起動した私と互角に戦ってるんだよっ！！！」

「嘘でしょ……生身の体でISと互角なんて……良いわ、今はそこから離れなさい、早くしないと織斑千冬達が来るわよ」

「分かったよ！おらっ！じゃあな！宮本武昭！！今度会った時は必ず始末してやるからな！！」

オータムは武装にあった煙幕の様な物を発動させると、その場から離れた。

それから少しして……

「おいっ！大丈夫か武昭!?……なっ!?なんだ、これは……」

機体を起動させた千冬が駆けつけたが武昭は体中傷だらけで、その場に立っており周りには多数の瓦礫等があった。

「武昭！ここで何が合ったんだ!?……武……昭?……武昭!!」

武昭が千冬を見ると安心したのか倒れそうになったのを千冬が慌てて受け止めたが意識が無かった。

この話では千冬が優勝した後に一夏から事情を聞いて会場の警備をしていたドイツ軍と一緒に探索に向かっています。

第36話 裏では……

武昭が千冬に発見されてドイツのとある病院に運ばれたのと時が前後して……

「私が！タツくんにあんな事を言わなかったら、ああなる事は無かったのに！！」  
ドン！

世界のどこかにある束の研究所で武昭の状況を知った束が強く握った拳で机を叩いて後悔して泣いていた。

「私はどこかでタツくんに甘えていたんだ……タツくんなら問題は無いって……けど、そうした結果が今回の……」

「束様……そんなに自分を責めないでください……」

束が自分のした事に後悔していると腰までの銀髪に両目を閉じた女性が寄り添うと束の両手を取った。

「クーちゃん……だって、タツくんがああなったのは私のせいなんだよ？……」

「束様、私は武昭様には会った事が無いから詳しくは言えませんが……白騎士・蒼龍事件の時に千冬様と共にミサイルを撃墜したのではありませんか？」

「うん、誰かは未だに分からないけど、あの時にちーちゃんとタツくんは私の頼み事を受けてくれたよ」

「その時に2人は束様を受け入れてくれた筈……もし嫌悪感があるのならば、その様な事はしない筈です……」

「クーちゃん……」

「それに束様がしなければいけない事は後悔する事では無く……武昭様の為に今出来る事をするべきでは無いのですか？」

「そっか……クーちゃんの言う通りだよね！よし！タツくんの体を治す為に特製ナノマシンを作るよー!!」

クーちゃんに元気付けられた束は袖で涙を拭うとキーボードで何かを入力し始めた。

「タツくん……私が悲しんでも何もならないよね……だから、待っててね……」

（束様が元気になって良かったです……では私は食事を作って来ましょう……）  
クーちゃんは黙って部屋から出ると料理を作りに向かった。

東が元気になった頃と前後してドイツのとある病院では武昭の手術をしていた。その手術室前のソファに一夏が座っていたが悔しさから強く拳を握っており近くの壁に千冬が寄り掛かっていた。

「なあ、千冬姉……武昭は……大丈夫だよな？……」

「……それは私には分からない……私がここに搬送した時に診察した医者によると息があるのが不思議だった様だ……」

千冬の言葉を聞いた一夏は拳でソファの座面を強く殴り付けた。

「クソッ！俺がもっと力があつたらあんな事には「無理だな」なっ！千冬姉！無理ってどう言う事だよ!？」

悔しがってた一夏は話を遮った千冬に詰め寄った。

「例えお前に力があつたとしても武昭と同じ事をする事は無理だ……武昭とお前とは【ある物】が無いからだ」

「千冬姉、そのある物って何だよ？」

「それは私に説明する事は出来ないし、例え説明出来たとしてもそれを理解するのは難しいんだ」

「どういう事だ」「一夏、ランプが消えたぞ」本当だ！」

一夏が千冬に問い詰めようとした時に手術中のランプが消えて執刀していた医者が出てきたので千冬が尋ねた。

「先生、武昭の具合はどうなんですか？」

「ええ、難しい手術でしたが出来る事は全てやりました……ですが意識はまだ……」  
医者が話しているとストレッチャーに乗せられた武昭が出てきた。

「武昭！」「今はまだ麻酔が効いてますが例え切れても目覚めるとは限りません」  
なっ……」

一夏が駆け寄ろうとしたのを医者が止めて説明を聞かされて信じられないと言った表情になっていた。

・  
・  
・

その後、一夏と千冬は武昭の病室にいた。

そんな中、誰かがノックをしたので千冬が許可を取ると眼帯をした青みがかつた黒髪の女性が入ってきた。

「失礼します、ドイツ軍特殊部隊所属クラリッサ・ハルフォーフと言います。

今回の事を謝罪しに来ました」

「ああ、そうか……今回の警備はドイツ軍が主体で行っていたんだっただな……それで…… 何故、この様な事が起きたんだ？」

「はっ！あの、その！（落ち着くんだ！今、私がすべき事は何を言えば良いかだ!!）」

千冬の迫力ある言葉を聞いたクラリッサはどう言えばこの状況を変える事が出来るか必死で考えていた。

「千冬姉、気持ちには分かるけど少し落ち着かないと彼女が何も話せないよ」

「そうか、一夏の言う通りだな……悪かったクラリッサ」

千冬は一夏に宥められると雰囲気は元に戻った。

その後、千冬と一夏はクラリッサから今回の経緯を聞かされたが……

（なんで私がこんな目に遭わないとダメなんだ!?）  
2 人の雰囲気を感じて涙目になっていた。

第37話 その頃……中国編。

ドイツで武昭が入院してた頃、中国では……

「はあ……武昭、元気かな……」

「鈴、普通は自分の父親の事を思い出すんじゃない？」

「フェツ!?き、聞いてたの!?!お母さん!!」

鈴が武昭の事を考えてると春音が声を掛けてきて赤い顔をして照れていた。

「まあ、空港で“あんな事”をされたら武昭君の事を思い出すのも仕方ないのかしらねえ……」

春音が笑いながら言うのと鈴は赤い顔をして黙ってしまった。

「それにしても……鈴もいい子に会えて良かったわね……」

「お母さん? どうしたの急に……」

春音が何かを考えて雰囲気が変わったので鈴は声をかけた。

「私とお父さんは最初、日本に行った時に心配したのは貴女の事だったのよ、鈴」

「え?なんで……」

「だって、私とお父さんは良かったけど、鈴はまだ小さかったから他の子達に虐められるんじゃないかって思ってたのよ……」

「そうだったんだ……お母さん、実はね私……転校した時に虐められてたの……けどね、それを助けてくれたのが武昭なの……」

「そんな事があったの……けど、武昭君に会えたから私達家族もこうしていいのよね……」

春音は鈴の話を聞いて日本で合った事を思い出していた。

「そうだ、お母さん、お父さんの具合ってどうなの？」

「ええ、少しずつだけど治療が進んでるみたいよ」

「そっか……ねえお父さんの体が完治したら、また日本に戻るの？」

「うーん……どうしようかしら……鈴としては好きな武昭君の近くに居たいでしょうねえ……」

「お、お母さん！そんなに言わなくても良いじゃない……」

「あら？じゃあ鈴は武昭君の事を好きじゃないのかしら？」

「いや、あの、その……好き……だけど……」

「そう、だったら鈴の為にも日本に戻ろうかしらね……私達にとっても義息子になるんだろうし」

春音の言葉に鈴は顔だけでなく体中が赤くなり頭から湯気が出てる程に照れていた。

そんな中……

パキン……

「え？……嘘……なんで……？」

何か音がしたので鈴が発生源を探すと小さなガラスの人形が割れていた。

「鈴、その人形って確か……」

「うん……私が日本にいた時に武昭から貰った誕生日プレゼントでガラスで出来た猫の人形よ……なんだろう……何か凄く嫌な予感がするわ……お母さん、私ちよつと日本に電話してみる……」

鈴は何かを感じたので日本の武昭が世話になっている道場に電話をした。

「あっ、すみません篠ノ之道場でしょうか？」

「はい、こちら篠ノ之道場ですが、どちら様ですか？」

「私、宮本武昭君の同級生の凰鈴音と言いますが……」

「ああ、鈴ちゃんなの？ 久し振りね、今日はどうしたの？ そんなに畏っちゃって？」

「はい、お久しぶりです雪子さん……今日はその……武昭に用事があったって電話したんですけど……」

「武昭君？ ごめんね、今武昭君はドイツにいるのよ千冬ちゃんの試合を観戦するのに一夏君と一緒に」

「ドイツに……ですか？……そっか……千冬さんは日本代表でしたね……（なんだろう、凄く胸騒ぎがして来た……）」

「鈴ちゃん？ どうしたの黙り込んだりして……」

「え？ な、何でもありません……分かりました、それじゃあ失礼します」

鈴が雪子との電話を切ったのを見て春音が話しかけた。

「鈴、武昭君はなんだって？」

「うん、今一夏と一緒にドイツに行ってるんだって、千冬さんの試合を観戦しに……」

「そう、なら一夏君に掛けてみたら良いじゃない？」

「そうね……あれ？何で……一夏に電話が通じないの？……」  
鈴は一夏に電話を掛けるが通じなくて不安に思った。

第 38 話 その頃……ドイツ編。 少し中国編。

クラリッサから事情を聞かされてから数日経って……

「ガハッ！ まだまだ……やれるぜっ！」

「ほう……さすがは教官の弟だな……だが、まだ甘いつ！！」

ドイツ軍の基地敷地内の広場の 1 つで一夏が長い銀髪で片目に眼帯をした少女と体術訓練をして投げられていた。

少女の名前はラウラ・ボーデヴィツヒと言いドイツの IS 部隊の部隊長をしている人物だった。

ラウラは以前に軍の実験の被験者になった事があり、その時の実験が上手くいかず失敗作と言われていた。

それから少しして千冬が来て教官として教育を受けて部隊内でもかなりの実力を持った。

そんな中……

「お前は……ああ、上官が言っていた教官の弟か」

ラウラが基地内を歩いてみると体を鍛えている一夏を見かけた。

「君は……もしかして千冬姉が教官をしてる部隊の……」

「そうだ、ラウラ・ボーデヴィツヒだ。お前に聞きたいが……お前は自分が教官の邪魔をしたと理解しているのか？」

「分かってるよ……けどな、ただの一般人だった俺に何が出来るって言うんだよ？ 幾ら千冬姉がISの操縦者って言っても俺は何も無かったんだ……なあ、教えてくれよ、俺は何をしたら良かったんだ？」

「そうか……（なるほどな……何か気になる事があったが、彼は以前の私と同じなんだ……）」

ラウラは一夏の表情から自分の事を思い出していた。

「私から言えるのは、何かしたいのなら色々とやってみる事だな。それで自分に何が出来るか見つけてみる」

「ボーデ「ラウラで構わん。」そうか、分かったよラウラ、ありがとうな」

「気にするな、力が無いという事はよく知っているからな。すまんが私はこれから訓練なので失礼する」

「色々やってみるか……じゃあ最初に……」

一夏にお礼を言われたラウラは訓練所に向かい一夏は何をしようか考えていた。

・  
・  
・  
・  
・

その後……

「千冬姉！俺も訓練に参加させてくれ!!」

「一夏……お前に聞くがなんで参加しようと思ったんだ？」

「簡単に言うとう自分の為だ。千冬姉も知ってるけど俺が攫われそうになった時、武昭がいたから助かったんだ……」

あの時に俺に他に何か出来る事があれば、武昭もあんな風になる事も……だから……」

「そうか……だが、私の訓練に参加するには生半可な気持ちは許さんぞ？」

「ああ、俺だって分かってるよ……それがどれだけキツイ事か……それでも俺は……」

千冬は一夏の決意が強い事を感じるとある事を命じた。

「分かった……では、これからボーデヴィツヒと体術訓練をするんだ。来るんだ  
ボーデヴィツヒ」

「は、はいっ！ラウラ・ボーデヴィツヒ来ました!!」

千冬に呼ばれたラウラは軽い小走りで近くに来た。

「これからボーデヴィツヒには、コイツと体術訓練をしてもらおう、良いな？」

「はい、それが教官からの命令ならば受けます」

「一夏、お前も良いな？」

「ああ、わかったよ……今は俺が出来る事をするだけだから……」

「そうか、ではお前らは少し離れた所で訓練を行うんだ」

千冬からの指示を受けた2人はその場を離れると訓練を開始した。

・  
・  
その後……

「これでどうだ !? うわっ !?」

「うむ、今のは良い動きだったが、そこで油断をしたな」

一夏はラウラと訓練をしていたが地面に投げられていた。

「ほら、手を貸してやろう、少し休憩する」

「ああ、ありがとうなラウラ……くそっ、折角上手く行ったと思ったのに……」

「それは当たり前だ私は軍に入って、それなりに鍛えているのだからな（だが……

さすが教官の弟と言った所だ）」

2人は休憩しながら話していたが一夏の成長力を感じたラウラは感心していた。

一方……

「なんで一夏に電話が通じないの？……もしかして何かあったの？……」

中国では鈴が一夏に連絡がつかない事を不安に感じていた。

「鈴？一夏君はなんだって？」

「いえ、一夏にかけても電話が通じないの、雪子さんが言うには千冬さんがモンドグロッソに出場するから一緒に行っちゃって言うんだけど……」

鈴は春音に事情を説明した。

「そう……じゃあ、まだドイツにいるんじゃないの？」

「そうかもしれないけど、もうモンドグロッソは終わって少し経ってるし……それ……」

鈴は割れた武昭から貰った猫の人形を見た。

「なら、千冬さんに連絡してみたらどう？」

「え？千冬さんに……？」

「ええ、連絡先は知ってるんでしょ？」

「うん、日本にいる時に聞いたけど……ちょっと苦手なのよね……」

鈴は千冬の事を思い出していた。

「そんな事を言ってる暇があるなら連絡しなさい！ じゃないと今日のご飯は抜きにするわよ!!」

「は、はいっ！ 分かりました!!」

春音に叱責された鈴は慌てて千冬に連絡をした。

その後、鈴は千冬に連絡がついたが……

「はい、わかりました……」

「鈴、どうだったの？」

「うん……ちょっと事情があつて今はドイツ軍にいるんだって……」

「そうだったの、なら連絡がつかないのも当然じゃない？」

「お母さんの言う通りなんだけど……何か隠してる様な気がしたの……（武昭……

一言で良いから声を聞かせて……）」

鈴は春音と話しながら武昭の事を考えていた。

## 第39話 終わりと始まりと……

一夏がドイツ軍でラウラに鍛えられている時と前後して、とある病院の一室では……

「そうか……まだ目覚めないのか……」

「ええ、手術が終わってから数日経ってますが……医師が言うには体の方は治っているんですが目を覚まさない原因が何かは分からないとの事です……」

千冬とクラリッサが武昭の入院している病室に来ていた。

「それで教官、聞きたいんですが、この少年は一体何者なんですか？」

「彼は、宮本武昭と言って一夏の幼馴染と言った所だ……そして、数少ない……私と互角に戦える者だ」

「なっ！？織斑教官と互角に戦えるですって!？」

千冬の言葉を聞いたクラリッサは驚いて大声を出したが病室という事を思い出してすぐに抑えた。

「教官、見た所この少年は弟さんと同じ位に見えるんですが……」

「そうだ、武昭は一夏と同年だ。だがそれでも私と互角に戦える程の実力を  
持っている」

「そうなのですか？……では、何故、その者がこの様な事に……」

「簡単な事だ、私の弟を……一夏を守ろうとしたからだ……」

千冬は悔しさから拳を握っており、クラリツサは黙って、それを見ていた。

その後、千冬とクラリツサが病院を出てから少し経った頃……

「うん、私の作った光学迷彩は成功だね」

武昭の入院している部屋のドアが開いたがそこには誰もいなかった。

「たっくん……ごめんね私があんな事を聞かせなかったら、こんな事に……」

その人物は武昭の右手を優しく握った。

「うん、ちーちゃんから言われた通り傷は治療してるけど目が覚めないのは……

暴走が関係してるみたいだね……」

その人物は握った手から武昭の今の状態を確認した。

「さてと、ここじゃこれ以上は無理みたいだから私の研究所に連れて行こうか

な、ポチっと」

その人物がポケットから何かを出してボタンを押すと武昭のベッドが大きなカップセル状の物に包まれた。

「これであとは研究所に運ぶだけだね……あっ私だけど今どこにいるのかな？ うんちょうど良いタイミングだね」

人物が誰かと連絡をして病室の窓を開けるとそこには小さな飛行機のような機体が飛んでいた。

「じゃあ、これを動かない様に固定してっ……じゃあ行こうか、おっと、その前に……これでよし」

その人物は武昭が包まれた物を飛行機に乗せるとベッドに何らかの書き置きをして、その場からいなくなった。

次の日の朝、病院の看護師が武昭の病室に行くともぬけのからになっていたのが急いで探そうとした時ベッドの上に一枚の書き置きがあった事に気づいた。

そこには……

【ここではこれ以上彼の治療は困難なのでコチラで治療を行う事にします。

詳しい話はドイツ軍で教官をしている織斑千冬にお聞きください】

と書かれていたので看護師が急いで院長に告げてそのまま千冬に聞くと……

「ああ、彼の事をよく知っている私の知り合いに任せたから問題は無い」と聞いたのでそれ以上の事は聞かない事にした。

それから1年が経って千冬と一夏は日本に帰る事になったが武昭の行方は分からなかった。

それから更に月日経ったある春の日……

「えっ？なんで……俺がISを？……」

高校の入試会場である男子生徒がISを何故か動かせていたり……

「ん……あれ？……ここは？……」

とある島にある謎の研究所で長い間昏睡していた人物が目を覚ましたり……

様々な人物達の新たな物語が始まろうとしていた……

次回から原作に入りたいと思います。

## 本編（原作開始）

### 第1話 IS学園

4月……

日本にあるIS学園で入学式が終わった後、生徒達はそれぞれの教室に来ていた。その中の1年1組で、ある1人の生徒に教室内の視線が集まっていた……

（くっ……。なんで、俺はこんな所に居るんだ!?!）

その生徒は机に突っ伏していた。

その生徒の名前は織斑一夏と言い、この女子しかないIS学園で2人いる男性操縦者の1人だった。

（まあ……違うクラスだけどアイツも居るから休憩時間にも話に行くかな？）

一夏が何かを考えているとチャイムが鳴って緑色の髪の女性が入ってきて教壇に立った。

「はい！私はこの1年1組の副担任の山田麻耶やまだまやと言います。それでは皆さんにSHRを兼ねて自己紹介をしてもらいます。出席番号順で行っていきます」

麻耶の指示を聞いた生徒たちは言われた通りに自己紹介をしていき一夏の番になった。

「はい、織斑一夏です。えっと……何故か男性でISを動かせたのでここに来る事になりました。どうか宜しくお願いします（ん？あれって……箒か……久し振りだな）パァン！痛っ!?!誰って……」

「全く……自己紹介を終えたなら着席するんだ」

一夏が自己紹介を終えてクラスを見回すと箒の姿が合ったので軽く見てると誰かに頭を叩かれたので確認すると見覚えがある人物だった。

「ああ、ごめん千冬姉……パァン！何するんだよ!?!」

「ここでは織斑先生だ、悪いな山田くんやまだまやにクラスへの挨拶を押し付けてしまっ  
て」「いえ、これくらいは問題ありません」

「諸君、私が織斑千冬だ。君達新人を1年で使える様にするのが仕事だ。私の言う事はよく聞き理解しろ。出来ない者には出来るまで指導をしてやる」

## 『キャーキャーッ!!』

千冬が教壇に立って話し出すとクラスの生徒達が大声を出して色めき立っていたが千冬に「貴様ら黙らないとどうなるか分かってるのか？」そう言われて黙った。

「ふう、まあ良い、これでSHRはこれで終わりだ。これから半月はISの基礎知識、それから半月は実習で基本操作を体に染み込ませてもらう」

そう言うのと千冬と麻耶が教室から出て行った。

その後の休憩時間に一夏は箒の所に向かった。

「よっ久し振りだな箒」

「あ、ああ久し振りだな一夏……それで、話したい事があるから……放課後に屋上に来てくれないか？」

「ああ、良いぜ。それよりももう1人の男性操縦者の事って聞いてるか？」  
「うむ、私は入学するときにあの人から連絡が来て知ってる」

箒の言葉を聞いた一夏はどこか納得した表情になった。

「そうか……まあ、あの・人・なら・そんな・事・が・出来・ても・特・に・驚・か・ない・け・ど・な」  
箒と一夏の中には心当たりのある人物の顔が浮かんでいた。

そう2人が話しているとチャイムが鳴ったので2人は教室に戻ると自分の席に座った。

1組で生徒達が自己紹介をしていた頃、1年4組でも自己紹介が行われていた。

「それじゃあ次の人お願いします」

「はい…… 2人目の男性操縦者になった宮本武昭です。皆さんと同じIS学園の生徒なんで気にせず話しかけてきてください」

「はいはい皆静かにしてちょうだい」

顔の所々に傷跡がある武昭が自己紹介をすると他の生徒達が騒ぎ出したが担任に注意されて静かになった。

その後、休憩時間になって武昭は隣の女生徒に声をかけた。

「ごめんね、俺のせいでうるさくなつて、更識さん」

「うん……皆が興味あるのは……当然だから……それと……私の事は簪って……名前で呼んでほしい……」

「分かったよ簪さん、じゃあ俺の事も武昭で良いから」

「うん……よろしく……」 **武昭……**

簪は頬を染めながら名前を呼んだ。

その日の昼休みの食堂で……

「色々々あるんだなあ……何に……「おい　！久し振りだな！」ん？ああ久し振りだな……一夏……それに簪」

武昭がメニューを選んでいると背後から声をかけられたので見ると一夏と簪が立っていた。

「まあ、話したい事は色々あるだろうけど、まずは飯を食べさせてくれ」

武昭に言われて一夏と箒も言う通りにした。

3人はそれぞれのメニューを注文をすると空いている席に座った。

「さてと、一夏とはドイツ、箒とは小学校以来だな」

「ああ、そうだな……それよりも、武昭……お前あの時何処に」

一夏が武昭に事情を聞こうとしたが手で制された。

「一夏、悪いが俺の事を話すのはちょっと無理な所があつてな……まあ一つだけ話せる事はあの時は兎のイタズラだ」

「ああ……そう言う事なら話す事は無理か……」

武昭の話の中にあつたある単語に気付いた箒はどこか納得していた。

「それよりも……俺はお前達の方が気になるんだけど？」

「ん？お前達って……俺と箒の事か？」

「ああ……あの時の返事はどうなったのになつてな？」

武昭がいたずらっ子の様に笑うと2人は顔を赤くして俯いていた。

その頃……

「それでは君には来週から日本の IS学園に向かってもらおう。すまないなコチラ

の事情で編入が遅れてしまつて」

「いえ、私の急な頼み事を受け入れてくれて感謝しています」

中国にある軍の施設内の一室で1人の少女が上官に頭を下げていた。

「いや、それを受け入れたのは君が 男性操縦者の2人と知り合いと聞いてこ  
らにも利があると踏んだだけだ。 もう宿舎に戻っていいぞ 凰・鈴音代表候補生」

「はい！それでは失礼します」

上官に頭を下げた鈴音はそのまま部屋を出て行った。

（武昭……また会えるんだ……）

鈴音は廊下を歩きながら武昭の事を思い出していた。

この小説では登場人物の性格が少し軟化しています。

## 第2話 ルームメイト

授業が終わった放課後の1年1組で……

「さてと終わったから家に帰るか……」

「あっ、織斑君まだいたんですね、ちょうど良かったコレを渡すのを忘れてました」

一夏が帰り支度をしていると山田先生がある事をしに来た。

「え？これって……鍵ですけど何の鍵ですか？」

「はいこちらは学生寮の鍵ですけど……あれ？話を聞いてないんですか？」

2人が頭を捻っているのと千冬が入ってきた。

「これからは家に帰らず、このまま学生寮に入ってもらおう、荷物は私が用意したから何か必要な物があるなら休日にも取りに行くといい」

「分かりました……けど、なんで急に学生寮に入る事になったんですか？」

「それに関しては国の方からとしか言えないんです」

一夏が疑問に思っていると麻耶がヒソヒソ声で理由を言ったので一夏は納得した。

「それじゃ俺は失礼します」

「ああ、言っておくが学生寮には大浴場があるがお前は使う事が出来ないからな」

「なんで……そっか今まで女子しかいなかったからか」

「そうだ、では私達は残ってる仕事を片付ける為に職員室に戻るが寄り道などせずには帰るんだ」

一夏にそう言うのと千冬は麻耶と一緒に教室を出たので一夏も学生寮に向かった。

一方、一夏が千冬と話をしていた頃……

「えっと、ここが俺の部屋か……」

武昭は先に学生寮の自分の部屋に来ていた。

「確か先生からは急に男性操縦者が見つかったから部屋は女子と同室って言うってたな……すみません誰かいますか？」

「はーい、どちら様ですか？」

武昭がドアをノックすると中から狐の着ぐるみを着た少女が出てきた。

「えっと、君はここの部屋の人で良いのかな？」

「うん、そうだよお〜 あっ、もしかして先生が言っていた男性操縦者の人〜？」

「ああ、2人目の男性操縦者の宮本武昭だ、よろしく」

「そうなんだあ〜 私の名前は 布のほとけほんね 本音だよ〜」

「そうか、まずは部屋に入っていていいかな？」

「うん良いよお〜」

本音に許可を貰った武昭が部屋に入ると2つのベッドが目に入ったが1個には沢山のぬいぐるみが置いてあった。

「えっと、こっちのベッドが布のほとけほんねさんの奴かな？」

「うん、だから空いてるそっちを使ってねえ〜」

「分かったよ、それよりもそろそろ夕食だけど布のほとけほんねさんはどうするの？」

「うーん食堂に食べに行こうと思うんだけど、あきあきっちはどうするのお〜？」

「それなら、俺はその間にシャワーを浴びておこうと思うんだけど……それよりもあきあきっちって俺の事？」

「そうだよぉ、嫌なら違う呼び方にするけど、どう？」  
本音がどこか心配そうな表情をしていたが武昭が了承したので笑顔になった。

「別に俺は構わないよ、布仏さんの呼びたい様に呼んでくれても」

「そっかぁ〜じゃあ私は食堂に行ってくるから〜」

「分かったよ、じゃあね」

本音は部屋を出て武昭は浴室に向かった。

部屋を出た本音は食堂ではなく違う場所に向かっております、到着したのは生徒会室だった。

「失礼しま〜す」

「本音、入る時はノックをしなさいと言ってるでしょ？」

「まあまあ虚ちゃん、本音ちゃんだから構わないわよ」

本音が中に入ると水色の髪の少女と薄桃色の髪に眼鏡を掛けた女性がいた。

水色の髪の少女は更識さらしきたてなし楯無たてなしと言い簪の姉であり、薄桃色の髪の少女は布のほとけ仏うつつほ虚ほと

言い本音の姉でもあった。

「それで本音ちゃんから見て彼はどうかしら？」

「うーん……まだ分からないかなあゝ？けど初対面からの印象からすると優しい感じがしたよおゝ」

「なるほど……本音ちゃんがそう言うなら、まずは問題無いかしら……どう思う？虚ちゃんは」

「私もお嬢様と同じです……本音の人を見る目は一目おいてますから」

「そうね、じゃあ戻って良いわよ本音ちゃん、もし何かあったら直ぐに伝えてちょうだい」

「分かりましたあゝそれじゃ失礼しまゝす」

本音は生徒会室を出ると食堂に向かった。

一方、本音が出た時と前後して……

「さてとルームメイトが帰ってくる前にシャワーでも『ピョンピョン』ん？兎

の鳴き声がしたな……はい、どうしたんですか？」

武昭がシャワーを浴びようとした時に何か音がしたのでポケットから取り出したスマホを見ると画面には『イタズラ兔』と表示されていたので出た。

『ヤッホー！入学おめでとうたっ君!!』

「ありがとうございます東さん、それで急に俺に連絡してきたって事は何かあったんですか？」

『うん、それはたっ君の専用機の事なんだけど基本機体は完成したけど武装が難しいんだよね』

「そうでしたか、まあ開発も良いですけど体に気をつけてくださいね？」

『う、うん、分かってるよたっ君（もう、私なんかの心配しなくても……）』

武昭の言葉を聞いた東は通信先で頬を染めていた。

「それじゃ、いつルームメイトが帰ってくるか分からないんで、これで失礼します」

『そうだね、それじゃ機体は後日ちーちゃんを通して送るからねーバイバイ』

「ふう……さてと、先にシャワーを浴びるか」

束との通信を終えた武昭は本音が帰ってくる前にシャワーを浴びた。

## 第3話 セシリアとの再会。

武昭が学園に来て次の日の朝、彼はジャージに着替えて校舎の外周部にいた。

「やっぱり、この時間は誰もいないか」おや ? 誰かと思えば宮本だったか」織斑先生」

武昭がストレッチをしてると声が出たので見るとジャージを着た千冬がいた。

「先生はどうしてって……もしかして早朝トレーニングですか？」

「ああ、と言う事はお前も同じみたいだな」

千冬は武昭の横でストレッチを開始した。

「ええ、どうしても昔からの習慣みたいな物なんで、理由がある時以外は出来るだけする様にしてるんですよ」

「そうか……では一緒に並走でもするか」

「構いませんよ、ちなみにここって一周は何キロあるんですか？」

「一周は約 5キロといった所だな、ではストレッチも終わったみたいだから走り出すか」

千冬がそう言って走り出すと武昭も横について走り出した。

2人は走りながら色々と話していた。

「なるほど、あの時に一夏はドイツ軍の訓練に参加したんですか」

「そうだ、お前が あんな事になったのは自分のせいだと考えてな」

「ああ……それはすいませんでした、けど「分かっていて、だがお前が傷付けば悲しむ者がいる事を忘れるな」はい、わかりました」

「そうだ、あの時にドイツから消えたのは アイツが関係しているのか？」

「ええ、あの人の所で治療をしました」

武昭は千冬から言われた誰かの事に心当たりがあったので名前をバラさないようにしていた。

「それでお前の体は大丈夫なのか？」

「はい、今はこうやって動けてますから……けど、ちょっと体が鈍ってるかもしれませんね」

「ほう……なら……… 久し振りに私の相手でもしてもらおうか？」

「ええ……俺も構いませんよ？」

2人は約束をすると獰猛な笑顔を浮かべていた。

その後、食堂の開く時間になったので2人はジョギングをやめて一旦、それぞれの部屋に戻った。

武昭が部屋に戻ると本音がまだ寝ていたのでシャワーを浴びる事にした。

「ふう、布仏さんが起きる前に汗を流すか」

武昭がシャワーを浴びる為に浴室に入って汗を流して出ると本音が目を覚ましていた。

「ん〜あれ〜？あきつちは〜？なんだ〜シャワーを浴びてたんだあ〜」

「ふう、ん？おはよう布仏さん、そろそろ起きて着替えて朝ご飯を食べないと遅刻するよ？」

「そうだねえ〜じゃあ、そうするねえ〜」

「なら、俺は浴室にいるから終わったら声をかけてよ」

武昭は本音が着替え始める前に断りを入れると浴室に移動した。

武昭は目を覚ました本音を連れて食堂に向かった。

「さてと、今日は何にするかなあ……」おっ、武昭もいたのか　！「おお誰かと  
思えば一夏だったか」

「まさか武昭もこの時間にいたとはな」

「箒も一緒だったのか、まずは先に朝食を選んでから席をみつけないか？」

武昭に促された2人はそれを了承した。

皆は、それぞれ朝食のメニューを選ぶと空いていた席に座った。

「そういえば、武昭の隣にいる人って……」

「ああ、彼女は俺のルームメイトの布仏本音さんだ」

「そうなのか、武昭は俺と同じで女の子が同室なんだな」

「ん？一夏、お前も女子と同室って……ああ箒とか」

武昭は一夏の言葉に心当たりがあつたがすぐに理解した。

「そうだ、誰か知らない人かと思つたけど箒で良かったよ、俺は」

「そ、そうか、私で良かったのだな」

箒は一夏の言葉を聞いて頬を染めて微笑んだ。

4人が朝食を食べてると長い金髪にロールがかかった女生徒が声をかけてきた。

「あら、織斑さん達も食事をしていたのですね」

「ああ、オルコットさんか、席を探してるならここ空いてるぞ？」

「それではお言葉に甘えさせてもらいますわ、あら？そちらのお方、もう1人の男性操縦者ですか？」

席に座ったオルコットは一夏の向かいにいた武昭に気づいたが武昭は何かを思い出していた。

「オルコットさんって言ったけど……もしかして、セシリア・オルコットって名前かな？」

「はい、そうですが……あら？あなたもしかして昔に私を助けてくれた方ですか？」

「やっぱり、そうだったか。ああ、久し振りだな」

「ええ、お久し振りですわ、こちらに座らせてもらいます」

セシリアは武昭の隣に座った。（下図の通りです）

一夏 箒

「テーブル」

本音 武昭 セシリア

セシリアは座ると気になっていた事を尋ねた。

「所で武昭さんがは織斑さん達とはどんな関係なんですか？」

「まあ分かりやすく言えば幼馴染……になるのか？」

「それで間違いは無いな」

「正確には私の家でしていた道場に武昭が来ていたのだ」

「なるほど、そうだったのですか」

皆が話していると千冬が来た。

「皆、朝食を取るのには構わないが授業には遅れないように」

「おっと、こんな時間だったのか、じゃあ俺だけはクラスが違ってみたいだから先に行かせてもらうよ」

「ああ、じゃあな武昭」

武昭は食事を終えたトレイを片付けると自分の教室に向かい一夏達も食事を終えてクラスに向かった。

# ISの世界に来た者。

---

著者 北方守護

発行日 2024年2月9日

ハーメルン-SS・小説投稿サイト-  
<https://syosetu.org/novel/71813/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。

---